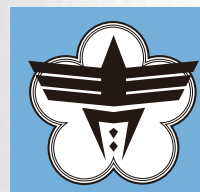


戦後六十五周年

戦争体験集

〈私たちの記憶〉



戦後六十五周年戦争体験集

「私たちの記憶」の発行にあたって

青梅市長 竹内 俊夫

戦後六十五周年戦争体験集「私たちの記憶」を発行するにあたり、ひとこと御挨拶申し上げます。

わが国は、昭和二十年八月十五日の終戦から、今年で早くも六十五年の歳月が流れました。時が経つにつれ、戦争を体験された方々が減り、悲惨な戦争の記憶の風化が懸念されるわが国ですが、今、私たちがしなければならぬことは、戦争を二度と繰り返さぬよう、戦争の悲惨さと平和の尊さを後世に伝え続けることであります。

世界に目を向けますと、今もなお、紛争やテロが絶えず、数多くの尊い命が奪われており、人々の心に深い傷を残しています。

わが国は、世界で唯一の核被爆国として、世界各国に向けて核兵器の廃絶と恒久平和を訴え続けており、青梅市といたしましても、平和事業の充実に力を注いでいるところでございます。この戦争体験集は戦争を知らない世代への貴重なメッセージであり、また、戦争を二度としてはならないという警告でもあります。

最後に、この冊子を発行するにあたりましては、多くの戦争体験者の皆様に御協力を頂きました。戦中、戦後の辛く苦しい記憶を思い出しながら書いていただいた原稿には、言葉にならないほどの重みを感じました。

発行に御協力くださいました皆様方のますますの御自愛、御発展を心よりお祈り申し上げます。



目

次



世界の平和を祈念して	．．．．．	田辺栄吉	．	1
戦争中の学校生活―空の青さに今の幸せを感じる―	．．．．．	青木幸代	．	5
戦時中の学校生活―よく働きました―	．．．．．	樋口光江	．	9
私の大東亜戦争の思いで	．．．．．	小山鶴枝	．	14
平和の尊さ・学童疎開の思い出から	．．．．．	中村豊子	．	17
無益と無謀な戦の歩み	．．．．．	新井藤作	．	23
私の体験した軍隊生活	．．．．．	吉永重平	．	28
私の戦争体験	．．．．．	原島好夫	．	33
サイパンへの慰霊に参加して	．．．．．	持田幸男	．	37
私の人生記録	．．．．．	石田光紀	．	41
				43
				40
				36
				32
				27
				22
				16
				13
				8
				4

あの日、あの時	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	小田中幸子	・	・	44 ＼ 45
学徒動員の地で原爆を対面す―十五く十六歳の青春―	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	光島章一	・	・	46 ＼ 50
被爆後の学童疎開	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	伊井栄子	・	・	51 ＼ 54
青梅のできごと	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・				55
戦中戦後年表	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・				58
青梅市内の平和像紹介	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・				63
青梅市郷土博物館の戦争関連収蔵品紹介	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・				65
世界連邦平和都市宣言	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・				74
青梅市非核平和都市宣言	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・				75
あとがき	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・				76

世界の平和を祈念して

田 辺 栄 吉



今次大戦が益々風雲を告げ、私が滋賀海軍航空隊に入隊したのは、昭和十九年九月末であった。青梅の町議会が終わった日で、多くの議員さんに送られて青梅の駅を發った記憶が、かすかに思い出される。夜行列車で大津に着き、伯父と父と三人で、三井寺に登り参詣してから、琵琶湖に面した正門から入隊したのが記憶に残る。

軍隊生活が始まり、「全員総起し」から、洗面を終わり、顔を拭きながら歩いていたのを咎められ、分隊長（少尉）から殴られたのが最初の一発であったのは、未だに憶えている。それからもう一度「何をにやにやしている」と言われて、分隊長（大尉）から一発頂戴し

たのが忘れられない。軍隊というところは、何と理不尽なところであろうかと思った。私は商家に育ち、笑顔で客に接するのが商道であると思っていたから、この一発だけは忘れられないのであろう。しかし、分隊長にしてみれば、海軍魂が入っていないとお叱りであったのであろう。

所謂、陸海軍を問わず「初年兵教育」は極めて厳しいものであった。訓練に耐えられず、脱走する者、自害する者、残飯漁りする者等を出したのもこの時期である。初年兵教育中の一日が非常に長く感じられ、多くの訓練生は、暦を一日一日と消しつぶしていったものである。

冬の比叡おろしの冷たさ、ボートを漕いで琵琶湖一周の時は、尻の皮は剥け、五体の感覚は麻痺してしまい、どの様にして帰隊したのか全く思い出せない。朝は海軍体操から一日の訓練が始まり、正門を出て日吉神社のある坂本で引返し、近江神宮前を通り練兵場

に戻り、朝食となる。朝の味噌汁の具に、琵琶湖のしじみの日が多かった。腹が減っているものだから、しじみの身を一つずつ残さず食べたものだ。そのせいか、今になっても、しじみの味噌汁が出ると、当時の事が思い出される。

海軍での教練の特徴に、棒倒しがある。一週間の中に必ず棒倒しは行われる。座学は航空三角が重要科目であった。夕方、また隊員が集合して、軍歌演習、最後に軍艦行進曲・「海行かば」を歌って行進の日程を終え、一日の訓練が終わる。

六ヶ月の初年兵訓練を終え、次期志願兵の長い列の中を、恒例の「帽ふれ」の送別の儀礼に送られた。そして我々は、各配属地に任ぜられ、滋賀海軍航空隊士官に見送られ、大津駅から東京へと向かった。私は館山砲術学校に入隊を命ぜられ、一ヶ月後、松島海軍航空基地にあった第七〇五海軍航空隊に配属された。松島駅から徒歩で基地まで歩いた。正

門にベニヤの戦闘機がおかれていたのが印象に残る。そこで、予科練習生で編成された分隊士に任ぜられ、海軍少尉候補に昇進した。何を教え、どんな訓練をし、如何なる作業をしたのか全く記憶していない。敢えて重要な任務と言えば、夜間、友軍機が飛来してきた時、滑走路両側にカンテラに火を灯し、予科錬生がこれを持って、等間隔に配置すること位であった。ある夜、三沢から友軍機が松島基地に向かった連絡が入り、命令により、直ちにその準備に入ったが、中止の命令が出た。後に聞いたところでは、松島に降りられず戻り、途中、山中に不時着したと言う。恐らく、制空権をアメリカに握られており、グラマンが出動したのであろうが、その責任はどうなったのかは知る由もない。

七月に入りグラマンの敵襲が頻繁になり、グラマンの大空襲があった。作業に出ていた我々の分隊は、予科錬生一同を、急遽基地の防空壕へと誘導した。その間グラマンの機銃

掃射にさらされた。頭の上を飛ぶ機銃の曳光弾の不気味な迄の恐ろしさ。標的に当たるまで撃つて来る。雨霰の如く頭上を飛ぶ弾丸、どの様にして防空壕に飛び込んだのか知らない。今度は相次ぐ爆撃で、我々の兵舎は跡形なく爆破された。この日、一人の予科練が防空壕入口で戦死した。敵機の攻撃を見んものと、入口を出た所で爆風により死んでいた。十代そこそこの少年であり、その死顔は眠っているあどけない童顔そのものであった。死体を医務室に運ぶよう隊員に命じたが、予科練習生の誰も死体を持つ者がいない。仕方なく私が頭を持ち、訓練生に足を持たせ、同期の生徒を医務室に運んだが、戦死した予科練生の童顔が眼の底に残って消え去らない。

八月に入って、各航空隊から陸上爆撃機の大発「銀河」二十数機飛来して来て、爆弾は積まず、機関銃を積み込み、片道飛行でサイパン島攻撃を決行することであった。いよいよ明日出撃すること、乗員は酒の

勢いで、軍歌を歌い、氣勢を上げていた。そしてその日の深夜、グラマン機に、ガソリンを満タンにした「銀河」は残らず焼き払われた。奇しくも、出撃する予定の特攻隊員の命が助かったのは、今思うと、せめてもの幸運と思った。

終戦の勅語を隊員と共に聞いたのは、農家の庭であった。

それから数日後、夜、隊員の一人が苦しみ出し、生徒をリヤカーに乗せ、近所の医家を訪れたが、敗戦後の事で玄関払いに遭った。やむなく離れた本隊の軍医に診て貰い、腸捻転との事で、直ぐ手術の必要から、トラックに病人を乗せ、松島から仙台まで約二時間、車を飛ばした。その間、トラックの上の病人は、余程苦しかったのであったのであろう、苦しさでうなり通しであった。何とか病院に辿り着いたが、後聞するところ、手術後亡くなったと言う。あの少年の苦しさからの呻き声が今も耳の底に残る。

終戦処理作業を終え、帰宅を許され、年老的司令官に除隊の申告を済まし、仙台駅のホームに立ったのは、昭和二十年十月の末であった。見渡す限り焼野原であったのを、茫然として眺めた事だけが、何か強く印象に残っている。

これからが大変な毎日の連続であった。特に、夫を戦争で亡くし、女手一つで三人の子供を育む叔母の生活を、はたからどうする事も出来ずに日々を過ごした。病を得た真中の子に、死の直前に医師に診て貰ったのがせめてもの慰みであり、唯子の死んで行くのを見届けるだけであった。この時の悲惨な様を思い出す度に、「二度と戦争はするまじ」と心に銘ずるのである。

戦後六十五年、未だに地球の一角で弾丸が飛び交っている。世界の賢人が強く核廃絶を叫んでいるのに、その事に耳を貸さない人達。人間は何と愚かなのであろうか。

「平和が如何に素晴らしく、戦争が如何に

悲惨なものであるか」を体験して来た我々世代の者にとっては、全くやりきれない思いでいっぱいである。平和を守る決意を持った日本人の我々は、初心を忘れることなく、平和運動にくたびれることなく、根気よく続けることを痛切に感ずる。今まで培われて来た日本人の頭脳と勤労を再開発し、宗教に寛容な民族性に忍耐に努め、精神修養に精進し、日本人一人ひとりが人格の成長に励み、他国の人達に信頼され尊敬される、我が国の品格を高め、強く世界の平和を説き、原爆の被害を受けた唯一の国として、世界の人々が心の内に願う平和の大切さを訴えてこそ、世界の平和が達せられる。

福沢諭吉翁は、我々に「独立自尊の心なき者は、国を思うに深切ならず」と諭した。国の品格を高める戒めが秘められた教訓と思い、日本は二度と戦争してはならない。

戦争中の学校生活

— 空の青さに今の幸せを感じる —

青木 幸代



ああ、なんと美しい空、澄み渡る青空に白い雲が薄らと散ってゆく、この様に、雲の流れに感動し眺める事の今が幸せなのです。この空は平和の世界、戦の世界、隅々まで広がっているのです。

木々も枯れていない。土も黒々として草もののびのびとしている。何十年前の見上げることの出来ない空の色は何色なのか。あの時、夜空は光っていた。

昭和十八年、三田村小学校に入学。私たちは、二俣尾分教所に一年、四年まで通学し、勉強した。一年生十七名が、お姉さんやお兄さん達と一緒に学校に行きます。学校では黒

板に、あいうえおと書いた大きな紙が張ってあり、その文字を見ながら、戦地で戦っている人達に送るための手紙の書き方を教えてもらいました。「お父さん、お兄さん、お元気ですか。皆元気で勉強しています」と手紙に書きました。また、二俣尾の駅で戦地に向かう方たちを、万歳、万歳と送りに行きました。何人も何人も戦地へ行きました。

年が明け、十九年、二十年と大変な年がきました。毎日警戒警報の知らせがあり、少しすると空襲の知らせがあり、学童たちを上級生の人が一列に並ばせ、小さい学年を守り、頭に防空頭巾をかぶり、手でしっかり掴み、家に帰ります。夜になると、西の方角から飛行機が、グングン、グングンと三角形に並んで東京方面へ飛んで行きます。すると、夜空にキラキラ、キラキラと光が落ちていくと、たちまち真っ赤に空が染まるのです、母が、八王子の方面が焼けていると話してくれました。東京の空が、昼間のように明るくなって

いました。



空襲の様子（青木幸代）

夜が明け、学校に行き勉強を始めると、お昼頃に警戒警報発令が出ます。まだその時には学校にいます。やがて空襲発令になると、いつものように一列に並び家に帰ります。すぐに防空壕に入ります。防空壕は深く土を掘

り、わらや筵が敷いてあり、少しの食料品が備えてあります。夜になると、グングン、グングンと飛行機が連帯をなし、東京の空を染めていきます。こんなに空襲が激しくなると、学校へ行くだけで勉強など出来ません。

ある日、学校に行くと、分校に疎開の子供達が来ました。先生が皆に話しました。「これから此処で暮らします。皆なかよくしてください。」

上級生のお兄さんやお姉さんは本校に通います。三田村尋常高等小学校は沢井にあり、役場もその場所にありました（現在沢井市民センターです）。しかし、戦争が激しくなると、上級生は勤労奉仕で、梯子を背負って、辛垣山でからむしの茎を狩り取り、その茎は竹を割った間に入れて皮をむきます。その皮が戦地の方たちの衣類をつくる材料に使うのだそうです。

戦争がしだいに激しくなり、分教場で疎開の児童が先生のお話を聞きながら泣いていま

した。私たちとはあまり遊ぶ事はなかったような気がします。

遊ぶといったら砂場で遊ぶのですが、その砂場に入ると、足にノミがたかるのです。DTという白い薬がまかれるのです。家に帰ると、頭がかゆくてガリガリかきます。母が頭を見て、シラミがたかっていると言って、床に紙を敷き、髪の毛をとかすとシラミが落ちます。爪でつぶします。何匹も何匹も落ちます。まだ髪の毛に卵がついています。毎日すくので、頭皮がとても痛かったのを思い出します。疎開の子ども達はお風呂にもあまり入らないので、頭をいつもガリガリとかいていました。

ある夜、母も父も隣組の人たちと一緒に警備に出ていました。子どもは家で寝ていました。突然、ドカンと、ものすごい音とともに家の中が真っ赤になり、驚いて、前のほうが真っ赤でだめなので、裏の戸を開け、姉が先に出て、私は妹を背負い外に飛び出しました。

お母さんが大きな声で名前を呼んで、駆けて来ました。「お母さん」と泣きながら駆け寄り、見ると前の山が燃えていました。飛行機が山に落ちたのです。消防団の人や吉野村の人たちは、敵の飛行機がきて爆弾を落とされるかも知れないと、山の木を倒し棒などで消していました。

その晩は、敵機襲来はありませんでした。翌朝、二俣尾の駅に目を隠されたアメリカの飛行士が、成木の山に落下して、助けを求めて下りてきたそうです。少しケガをしているみたいでした。日本の服と違い、髪も違い、私たちは恐ろしい者を見るように立ちすくんでいました。そこへ電車が来て、目を隠したままで乗って行きました。

その後、恐ろしい原爆投下で、恐ろしいことが、広島や長崎と相続き、大勢の人たちが亡くなったことを、学校で先生が話をしてくださいました。

その後、ラジオから、戦争は終わり、日本

が負けた事を知らされました。

大人の方たちは、ラジオから流れる天皇陛下のお言葉を聞き、涙を流しておりました。

今の子ども達は、テレビや雑誌などで戦争を見たり聞いたりしていますが、私たちの戦争中は勉強する時間があまりありませんでした。

私たちの世代にある感傷的な思いがあり、今の文化の有様に首をかしげ、私たちは、あの時代に、何か忘れ物をしてきたのではないかと思うこの頃です。

戦時中の学校生活

——よく働きました——

樋口 光江



第二次世界大戦の始まったのが高等女学校一年（現在の中一）の時でした。十二月八日の朝、登校の道でも、軍艦マーチと共にラジオは「米英と戦闘状態に入れり」というニュースをくり返していました。「こんどの敵は大きい国だね。」と、友人と話しながら学校へ急いだことが、昨日のことのように思い出されます。

日本は、既に四年前から中国と戦争をしており、近所の人もたくさん出征し、戦死された人もおられました。友達のお父さんの武運長久を祈りに、毎月のように高水山へせせと登ったものです。

さて、女学校に進んだものの、憧れていたこまかい襷のスカートも、白い運動靴の上履もありません。しばらくして、府立の女学校一律の制服ができましたが、ヘチマ衿にフレアスカートの黒い変な服で、みんながっかりでした。

日常の生活物資は何もかも不足してきて、運動靴さえ配給で一クラスに何足と割り当てられ、順番に手に入れました。革靴は踵や底を修理しては履き、布製の足首までのものをよく履きました。下着のパンツやシュミーズも、裁縫の先生が教えてくださり、あり合わせの布で、自分で縫って着ておりました。

戦時中の学校生活で特筆すべきは、授業が満足に受けられなかったということでしょう。昭和十九年から終戦までの間は、勉強どころではありませんでした。小学生も私たちもみんなです。運動会は二年の時までで、今言う文化祭も修学旅行もあります。一度だけ、学校から鳩の巣までを往復する競歩会という

行事があつて、嬉しそうな写真が残っています。

授業では、まず英語が二年の途中でなくなりしました。興味のある人はその後も自習で続けたと思いますが、英語を敵国語と言ったのです。私はテニス部で、ある時、競技用語を全部日本語に改めるといふ講習の大会に出ました。プレイボールなんてもう言わない、試合開始、線内、線外、網などと、笑い話のよくな審判風景でした。

体操の時間では、隊列行進の練習が多く、短棒投げを競ったり、白鉢巻でなぎなたの構え方を習ったりしました。ある日の作法の時間では、テーブルマナーを習うのですが、並ぶのは空の皿やコップばかりで、おもむろに食べる真似です。今でもクラス会で思い出しては大笑いになります。

漢文の授業は、たったの二時間だけ。東洋史西洋史は、私の大好きで楽しみな授業でしたが、西洋史は三年で習うもので、先生がい

くつかのポイント（たとえばゲルマン民族の大移動など）をかいつまんで教えてくださったように思います。

それというのも、この頃は学校農園の作業とか、運動場の砂場の砂を多摩川から袋に詰めては運ぶとか、防空演習、防空壕掘り、戦地への慰問袋作りなどに勉強の時間を使っていました。また、働き手が出征してしまった農家に、草取り、麦ふみ、お茶摘み、繭かき、いも掘りなどの手伝いに行きました。新町や瑞穂長岡の辺りまで、三、四人組んで頼まれた家に行き、一日働きます。往復歩いたように思います。おばさんが出してくださるじゃがいもやさつま団子のおやつが、とてもうれしかったのです。自分で縫ったもんぺをはき、ピケの帽子をかぶり、水筒を下げ、まこと甲斐甲斐しい十四、五才の働き手でした。

四年生で勤労動員となり、授業は殆どなく、軍需工場での仕事です。週一回、工場へは行かず、講堂で先生方や他からの方の話を聞き

ました。

国防色（カーキ）の上下服が支給され、日の丸と神風と書かれた鉢巻をし、どこへ行くにもその姿で防空頭巾を背負っていました。

学校工場というのもあり、裁縫室に電動ミシンが持ち込まれ、飛行機のタンクのすき間に詰めるフェルトを麻布で包む仕事をしました。昭和飛行機の工場へも行ったりしました。私の最後の職場は、天ヶ瀬の榎戸織物工場でした。登校し、先生に引率されて行きます。指導員が数名おり、その下で木工機の商品を作ります。私は尾翼や方向舵の骨の部分を、小さな鉋や鋸やのみで形づくり、接着剤で規格通りに仕上げます。他のグループは、その骨を大きい順に並べて、ベニヤ板をかぶせるように張り、更に麻布で包むという仕事をしていました。作りながら、私たちは、果たしてこの飛行機は本当に飛ぶのだろうか、一体どういう人が乗るのだろうかと思いをめぐらせたものでした。

当時二年生だった妹も、勤労働員で大神の工場へ通いました。ジュラルミンに鋳を打ち込む仕事で、うまく出来なかったそうです。仕事中、何度も空襲に遭い壕の中に逃げる、逃げても機銃掃射してくる米兵の姿が見えるほど近づいて、それがとても怖かったようです。電車が動かず歩いて帰宅したりもしました。戦争末期には、材料不足で仕事のない日もあり、そういう時、先生方は寸暇を惜しむように、木蔭などで勉強を教えてくださいましたそうです。

どの工場も、昼食を用意してくれました。大豆の搾りかすや、コウリャンや、芋類の炊き込まれた御飯、おかずでは呉汁の出た記憶があります。食べられるだけ有難いという気持ちで、みんな黙々といいただきました。また、工場から給料が出ました。金額など忘れましたが、それが学校の月謝、その他の納付金になったのだと思います。

四年生の年が明けると、それぞれ進路を心

配しました。私は教員確保のために都内に増設された女子師範学校に行く決心をし、受験に備え自習に励みました。家の近くに品川区の学童疎開の宿舎があり、朝晩、食事などの手伝いに行っていましたので、その引率の先生に、子どもの寝たあと数学を教わったりもしました。

師範に合格はしましたが、三月十日の東京大空襲で、至る所焼野原、校舎は残りました。が、入学は七月一日でした。

女学校も三月には修了式があり、進学する者、五年生に進む者、家庭に入る者と別れ別れになりました。「海ゆかば水漬^{みづ}く屍^{かばね} 山ゆかば草むす屍……」と、美しくも悲愴なメロディーの防人の歌が、私たち昭和二十年の卒業歌だったのです。

危険な東京へ行くことはないと家族に止められながらの登校は、終戦までの一ヶ月半でした。炎天の校庭で、終戦の詔勅を聞きました。わけがわからないまま、皆立ちつくし泣

いていました。空が抜けるように真青な日でした。

米軍がどこに進駐して来るかわからないので、沙汰があるまで自宅待機となり、十月になって、やっと授業が始まりました。

戦争は終わっても、相変わらず食べ物はなく、衣類もアメリカから届くララ物資の古着などを、分け合って着ていました。校舎の水洗トイレは汲み置き水をバケツで流すなど、切ない思いの募る日常が続いていました。

しかし、教室では、新聞紙を折ったような粗末なものでしたが、新しい教科書が出来てきて渡されましたし、先生方は新教育をどう進めたものか模索しながらも、課目を新しく改めるなどして、熱心に教えてくださいました。「なぜ眼は二つあるか」これが美術の先生の第一声で、今も耳の底に消えません。

渇いた土に水が染み入るように、私たちは勉学に精いっぱい励み、楽しみました。スポーツもまたやれるのだと思いました。

平和な時代が来た、これから新しい世の中を
みんなでつくっていくのだという、希望に満
ちた時代の始まりでありました。



昭和19年学校工場



昭和20年1月3日

私の大東亜戦争の思いで

小山 鶴枝



ゴ—ゴ—ゴ—、バリバリ、ドーン、ド
ーン、というもの凄い爆弾の炸裂音、ガラス
の裂ける音、その瞬間、目の前が真っ暗にな
りました。気がつくと畑の中に倒れていて、
体の上には桑の葉や土がバラバラと降ってき
ます。敵の飛行機はまだ、ゴ—バリバリ、
ドッカーンと攻撃していました。既に私のと
ころからは過ぎておりましたが、体の震えが
止まらず、起き上がることさえできません
でした。しばらくして力が抜け、「アー、生き
ていたんだ！良かった！」という思いが、心
の底からこみ上げてきました。「人間生きた心
地がしなかった」というのはこういうことを
言うんだな—と、ボーっとした頭の中に、な

にか人ごとのように思ったことを思い出しま
す。その時の時間が、一瞬だったのか一時間
以上だったのかも覚えておりません。とても
長く感じましたが、たぶん十分か二十分のこ
とだったのではないのでしょうか。今でも思い
出すと背筋がゾ—っとする、一生忘れられな
い恐ろしい思い出なのです。

それは、昭和二十年四月の時の出来事です。
平和な今でしたら、四月といえば、山は新
緑に包まれ、花が咲き乱れ、小鳥のさえずり
が聞こえる、一年中で一番良い季節ではない
でしょうか。しかし、終戦を間近にしたその
当時は、そんな美しい風景など感じることな
ど出来ませんでした。私は、その年の一月に
女子挺身隊として、拝島村より六十五名徴用
として招集されました。その内の六十名は昭
和飛行機に働きに行き、残りの五名が拝島郵
便局に配属されました。十七才だった私は、
残りの組の郵便局に決まったのです。その当
時は、男の人は兵隊や、兵役を免れた人は軍

需工場に取られ、絶対的な人手不足で、女子徴用制度が出来たのだと思います。その時の私の仕事は、郵便物の集配でした。受持地域は（日によっては違うのです）、上河原、宮沢、四一五という昭和飛行機の社宅二百五十戸と、昭和前商店街、そして最後に、昭和飛行機の前、赤いポストから投函されている郵便物を持ち帰るといったものでした。

その日、私がいつものように昭和前の商店街を配っている時、突然、警戒警報が発令されました。昭和飛行機の社員さんたちは皆、拝島大師の森へ避難を始めておりました。

郵便局の規則では、警戒警報が鳴ったら、ただちに局に帰りなさいとなっておりました。が、私は、商店街ももう少しで配り終るし、あと昭和飛行機前のポストから郵便物を、回収するだけだから、と思ったのが間違いでした。

その日は、澄み切った青空で、東の空に遠くから「ゴー」という音をたてて、赤とんぼ

の群れがこちらに向かって飛んでくるように思えたのも一瞬。その時です、空襲警報に変わったのは。凄惨な轟音とともに、昭和飛行機と私目がけて襲いかかって来たのです。私は赤い自転車を遠くへ放り投げ、無我夢中で逃げ迷いながら、桑畑に逃げ込んだのだと思います。そして気を失ったのです。その時赤トンボに見えたのは、後でわかったのですが、アメリカの航空母艦に搭載した艦載機が三多摩地区を襲撃したと、大東亜戦争日誌に記されておりました。また、何にも知らずに逃げ込んだ桑畑の中には、飛行機の発動機が隠れてあったのだと知りました。

これは、私の一番怖かった思い出ですが、八月十五日の終戦になるまで、日本中が戦場でしたので、田畑は荒れ放題、戦後になって、国交は閉ざされ、食べ物はなく、餓えに苦しみながらも、一生懸命みんなで頑張りました。だからこそ、戦争には負けましたが、今の日本があるのです。でも、私は絶対に戦争

はやってはないと思います。世界が平和でありますように！

先日、福生の公民館で、元総理大臣の安倍さんの講演の中に、こんなお話がありました。安倍さんのお友達に二世（父がアメリカ人、母が日本人）の方のお話です。その人が、終戦後間もなく、日本に派遣された頃のお話です。

当時、日本では、多くの戦災孤児がアメリカ兵の靴磨きをしておりました。二世の方も磨いてもらったそうです。その時、昼も過ぎて、その子も腹も空いているようなので「君、これを食べなさい」と言ってサンドイッチを差し出すと、嬉しそうに「ありがとうございます」と言ってそれをポケットに入れようとなりました。二世の方は「君、今食べていいんだよ」と言うと、その子は「はい。でも家に僕の帰りを待っている妹がいるんです。だから、帰って妹と二人で頂きます」と言ったそうです。その時ほど、日本人の母の子で良か

ったと、しみじみ話されたそうです。教育勅語の中にも、父母に孝行し、兄弟仲良くし、夫婦は調和よく協力しあい、友人は互いに信じ合い、慎み深く行動し、とあります。私は安倍さんのお話に感動致しました。

最後に、私の大好きな座右の銘を記させていただきます、終わりとさせていただきます。

憂きことの 尚をこの上に 積れかし

限りある身の 力ためさん

これは熊沢蕃山の和歌です。この和歌の意味は、「苦しいこと悲しいこと、もつともつと与えてください。私は必ず、乗り越えてみせます。」

昔から、日本人は鍛えてきたのではないでしょう！本当にありがたいと思いました。

平和の尊さ・学童疎開の思い出から

中村 豊子



不幸にして戦禍の中に巻き込まれた、当時の私達には、疎開は避け難い出来事でした。六十五年という、半世紀以上も経った今でもはつきりと、思い出は昨日のこの様に浮かんでまいります。

空襲などの被害を少なくするため、疎開は、学童疎開（三年生～六年生）、残留組（二年生以下）と縁故疎開でしたが、大山には、川崎市内の九校が集団疎開しました。昭和十九年八月二十一日、私達旭町国民学校は、その九校のちょうど真中あたりで、良弁滝、権田直助翁の墓地近く、上下、八宿舍が割り当てられました。

宿舍

先導師宅に、八班に分かれました。私は本部に配属され、二十四時間教育のスタートでした。二、三日して、ホームシックで夜泣きの女の子、四日目には、四年男子が、三、四人連れだって脱走、駅より連れ戻して来ましたが、遠足気分であたら、大変な集団生活、家が恋しくなったのでした。朝は、大太鼓の合図で起床、布団片づけ、洗面、室内掃除、ラジオ体操、朝食、それからそれぞれ学年男女別に各担任の寮へ。終わると、自分の寮に戻って昼食です。午後は自由時間でしたが、無断外出は許されず、自分の宿舍で仲間と遊びます。おやつ、夕食、入浴は三日おき位に、小さいプールみたいに、数人ずつ寮母さんの指揮のもと、どこかつと入ります。就寝は百畳の大広間に百八名が床を敷く、凄いいものでした。真中だけに裸電球が二個程、うす暗く、トイレに行く時が大変だったようでした。

「お父さん、お母さん、先生、皆さん、おやすみなさい。」全員正座をして、声を揃えて挨拶をしました。親元を離れ、日々の共同生活

の中で、一番寂しさが込み上がって来た瞬間だったと思います。

勉強

各学年担任宿舎に通ったのですが、寢床・食事・学びの場で、オルガン、机（裁縫の長机）、両脚に長い板を載せて補充した机、お座りの学習スタイルでした。ほとんど国語、算数、音楽ぐらいで、午前中で終わりでした。

作業

午後は近くの杉山で、落ちている枯枝拾い、そだ集めでした。荒縄で背負って山から下りるのです。配給のお米、野菜などは、ずっと山を下った、車の入る鳥居のあたりからの運搬でしたが、坂道をリュックで背負いあげる、きついものでした。主に五、六年生が先立ってやりましたが、文句も言わず、今の子ども達に無い頑張り、我慢強さが、あの貧困な時代と共に自然と鍛えられたかと思えます。

病氣

山には一緒に疎開された、たった一人の女

医先生が、少し上の方におられましたが、内科のみで、外科的なものは、伊勢原、秦野まで行かねば用が足らず、バス（木炭車）も本数が少なく、子どもをおんぶして連れて行く職員の苦労も大変でした。

八月三十日、擬似赤痢発生。六年男子を、男の先生と二人で、川崎の親元まで送りました。私は家に一泊出来、翌日、帰山が市の防疫員より遅れて、先に着いておられた市の視学官S先生にお説教されてしまいました。その時若かったし、無知でしたから、反省どころか、職を辞め、ただ家へ帰りたかったです。ひとりっ子育ちの甘えがあったかと、今になり反省しています。

冬になり、六年男子が薪拾いに出かけた時のこと、霜解けの足場が崩れ、石山だったので、落石に遭ってしまったのです。K君が逃げ遅れて、右耳朶を切ってしまいました。その日は分団長も引率していて、抱えて戻った時の先生のセーターの胸が真っ赤に血で染ま

っていて、驚きと、これは大変な事になったと、慌てたこと、強く記憶に残っています。

看護婦として本部付の丁寮母さんが応急処置をして、日赤へおんぶで男の先生と連れて行き、縫っていたきました。その後の通院が、交通不便な山の事で、暫くの間、寮母さんの大変なお役目でした。

また、六年女子の丁子さんが、食事のお手伝いをしていて、床板の古釘を踏んでしまいました。

この二人共、涙こそ流しても、大声で泣きもせず、傍に親もいないし、泣くのをグツと我慢したのだろうと、今思い出しても偉かつたし、本当は可哀想だったなあと、あのキューピーさんみたいなチャームングな大きい瞳の丁子さん、おとなしい心優しいK君の顔が忘れられません。

戦況が厳しくなり、大山の惨事後、秋田への二次疎開の話がボチボチ持ち上がって来たその頃、各宿舎では防空壕掘りが始まりま

した。本部でも、東側の竹藪の傾斜地に掘り始めました。

ある日、掘り出した石混じりの土を庭に撒いて、踏み固めていた分団長先生が、土踏まずに、上下抜けるような裂傷を負いました。土が傷口に入っていたかもしれせん。すぐ看護婦さんが消毒をし、友人である平間校の丁分団長先生をお願いしたのです。軍医資格を持っておられ、治療に当たってくださいました。消毒、リバーガーゼの紐状の詰め替えで、その荒療治には「ウォーツ」と、男泣きで、頑張っておられました。幸い快方に向かい一ヶ月位の松葉杖生活が続きましたが、ひどくならずには良かったことでした。当時、常備薬品といったら、赤チンキ、ヨードチンキ、オキシドール、リバノール液、それに**硼酸軟膏**、**亜鉛化軟膏**でした。

疎開してすぐ、シラミ、ノミには凄く悩まされました。搔きむしって、体は芥蘇皮膚病が蔓延しました。オカッパ頭の女子は、水銀

軟膏を擦り込み、暫くタオル、手拭いを被り、庭で日向ぼっこ。すると、繊維の間にシラミが頭を突っ込んで、盛んに悶え出します。その手拭いは熱湯消毒。髪の毛はすき櫛で梳き、卵をこそげ落とし洗髪です。衣服のシラミは色が白っぽく、衣類の折り襷に多く潜んでいて、DDT散布や、大釜で煮沸退治の大がかりでした。

散髪は、平塚からの奉仕団のお世話になりました。来られなくなつて、寮母さんがバリカンを握つて奮闘しました。

面会

大体決まっていたけれど、突然でも許されました。布団や衣服の手入れ、子どもへの食物の差し入れがされました。持参された物は全部公開して貰い、子ども達に、小さく割つても平等に分け与えるというこの分団長の方針で、百八名の子どもを、みんな同じに大事にされた父親の様なご判断には、教えられるものがありました。我が子には、こっそり別

に置いていくという親心はわかりますが、行きはよいよい帰りは怖いで、親子だけの時間内に、思い切り一気に沢山詰め込むせいか、大抵は、あと消化不良で、下痢、腹痛。困りものでした。

食事

何たる十分な量はなく、空腹の毎日。大豆粕、少量のお米の雑炊、すいとん、時季の野菜、じゃが芋、さつま芋、大根、ゆで大豆などの食事でした。子ども達の手紙には、面会の親を待っている以上に、先ず持つて来る食べ物、何たる楽しみだったのです。親は乏しい配給の中から、自分の食べる量をつめて、お饅頭、おはぎなど、沖縄出身の方が多かったせいか、今の黒糖の固まり、当時のグリコース、金ペイ糖、など甘味が多かったです。

暖房

陽当たりの悪い百畳の広い座敷の片隅で、四年女子二十名程の学習でした。火鉢では冬場は寒さがひどいので、川向こうの陽だまり

の墓場に逃げました。国語の本を大きな声で読んだり、歌の練習をしました。お墓に眠っていただける方々には、「頑張っているね。」と快く許して頂けると、勝手に屍を向け石段に腰を下ろしたものでした。すると声を聞いて、西側の一段と高い亀井寮の四年男子が、「また来ている」とばかり二階の窓から顔を出し見られていた事も、今思うと奇抜な学習スタイルだったと、にっこりです。

トイレ

ポッチャン式の足場が、古く不安定で、しかもうす暗く、子ども達は、さぞ夜中には億劫だった事でしょう。寮母さんが声かけをしていたのですが、失敗も多いものでした。「ふとん干し」と、朝号令が掛かってても、押し入れに残されている布団。決まって大きな地図が出来ていました。三、四年では仕方ないことでした。

被爆

昭和二十年五月十九日、五年生の米須清博

君が即死。神奈川県学童疎開児、第一の犠牲者でした。同じ時、隣家で大人三名も爆死されました。その時、もう少しで私も危機一髪の瞬間でした。この事件の前後にも次の体験もありました。

一、大空襲。東京が狙われ、大山から京浜方面の空が真っ赤でした（二十・三・六）。本部の浅草出身の寮母さんの御両親が亡くなられました。

二、川崎の大空襲。本校連絡で帰川した夜、ドカンドカン、タタタタ、ドシン、ヒューヒュー、ザザーッと、雨の様な冷たい物、キラキラとガソリンを撒かれ、しかも焼夷弾のバラ撒き。低空の敵の飛行士の顔が真っ赤な空から見える距離。直撃されそうに怖い。裏の大池の淵の道端に避難しました。地面に伏して、防空頭巾の上から、空っぽのブリキの米櫃をかぶって、恐ろしさをこらえました。ドウドウと、焼け出され逃げ移る人たちの足音が響いていました。此处で死んじゃうと、

本当に思いました。日本の高射砲の、ドカン
ドカンは音のみで、敵機は落とせません。我
が家は裏の家作二軒と共に免れましたが、隣
組では防空壕の中で三名が即死され、辺り一
面の焼野原と化してしまいました。翌朝、ト
ボトボと白煙の立ち昇る、灰と化した遙か先
の地平線からは、物凄く大きな太陽の真っ赤
な色、昇っていった有様は、未だに忘れられ
ない恐ろしい異様な風景で、記憶に焼き付い
ています。戦争の恐ろしさです。

三、伊勢原駅前のバス待ちの時、突然機銃掃
射に遭いました。私は、形ばかりの覆蓋なし
で、すり鉢型の防空壕にとび込みました。駅
長さんが、マイクで「動かないで下さい」と
注意していましたが、皆さん一大事で、ウロ
ウロと逃げまどい、夏の白い服が目立つので
怖かったです。すると、パーンと凄い音。そ
の時ホームにおった軍人さんの頬っぺに十円
玉程の怪我をされたと、後で聞きました。
四、熊谷の大空襲。戦局厳しさを増し、一人

っ子の私は親の疎開先、行田市へ転勤を願い
出ていました。また、休暇を頂き泊ったその
夜、隣の熊谷市が空襲に遭いました。二階か
らリュックと防空頭巾をもって階下へ。その
速さに家人が驚いていました。何回も怖い目
に会っている私です。動作が速かったのです。
ところが、翌日、終戦の玉音放送をラジオで
聴きました、ただ涙がこぼれ力が抜けました。
五、戦没死。旭町校のH校長先生のご長男が
真珠湾攻撃で、開戦の犠牲になりました。
又、私の従兄弟も近衛兵で、ビルマで戦死。
埼玉出身の代議士だったので、二回目の
出征でしたが、それは秘密召集志願をし、七
人目の戦死だったと聞いています。

むすびに

この様な、幾多の命を奪い戦争の如何に残
酷なのか、平和の尊さを噛みしめ、再び疎開
など起きない、真に平和を愛する気持ちを持
ち続け明るく生きてほしいです。

ありがとうございます、笑顔、思いやりの心を忘れず。

無益と無謀な戦の歩み

新井 藤作



小さな流れもやがては大流となり、その勢いを止める事の出来ないのが戦争ではないかと思う。間違いとは思いつながらも、その声もかき消され、全てがその勢いに呑み込まれ魔の極限に達してしまう恐ろしさを心から感ずるものです。明治二十七年日清戦争から始まり、五十余年の間に六回もの戦争に明け暮れ、遂には敗戦の憂き目を見、国土の荒廃を、計り知れない経済力の損失、加えて多くの尊い命を犠牲にした不幸は、戦後六十年余も経た今日でも大きな負として残っております。満州事変から中国戦争へと、日本の進出と強大化を恐れた米英仏蘭がA B C D包囲網による経済封塞を強め、万事窮する我が国としては、

遂に戦争へと突き進む羽目となる。戦争を知り語れる人たちも既に八十歳代となり、年ごとに風化されるなか、その一端をと思い、筆を取らせて頂くものです。

日本全体が戦争に向け一億一心の体制で、徴兵制のもと、健康な男子は戦線へ、あるいは本土防衛に、残るは軍需工場へ、女子も家庭婦人を中心に国防婦人会を組織し、敵機襲来の爆撃、火災消火、救命に備える訓練が真剣に繰り返された。また、男子による国土防衛組織敵に対する備え、竹槍訓練、中学生の銃剣術軍事教練、小学生の農作業手伝い、山村にありては薪炭の運び出し、軍馬飼料用乾燥茅草の供出などに動員を受けた。食糧国内での完全自給のため、荒廃地は全くなく、山林の一部まで作付可能地を開墾、増産に、一億国民が生きる為と、お互いの務めと努力した。特に、農家の食糧供出割当は年々厳しくなり、冷夏による不作時には、供出残りの不合格品のみを食する事すらあった。供出割当

は各農家の耕地面積別により、米、陸稻、大麦、小麦、裸麦、馬鈴薯、甘藷、粟、蜀黍を主とし、野菜など作る余地がほとんどなく、一般家庭でも僅かな土地を利用し南瓜を作り、一助にと努めた。配給では、絶対値が足りないため、甘藷などの買い出しに遠く千葉県までも、満員電車のなか一家の命を継ぐため、死にも狂いの努力が払われた。また、広く野と山に生える草でも、食せるものがなくなるほどに命の支えとした。農家の割当供出に対する代金も、決して充分ではなく、僅かな肥料の配給と、貴重な地下足袋が希に配給されてもゴム底が三日と持たずぱっくりと割れ、使い物にならない始末。また、国民に対する食糧の配給制が昭和十四、五年頃より始まり、更に昭和十八年より国家統制令、総動員令のもとに、民間の企業組織も国有化され、戦時色に組み込まれた。青梅電気鉄道株式会社も国鉄に、伝統ある青梅織物の大口工場は軍官の衣服縫製の為に接收を受け、全くの自由を

奪われた。超資源大国の連合国に対しほとんど無資源の我が国として、長期戦のため元々物資の少ない全国の家庭から大小に拘わらず金属類の自主供出が強力に推進され、お寺の釣鐘、御岳登山鉄道のケーブルカー、レール、橋脚まで解体供出、また、航空燃料の一助にと、多大の労力をかけ伐採松の切株を掘り出し、松根油の採取を計るなど、全国持てる力を出し切るぎりぎりの努力が、昼夜を分かつず行われた。

私達の青梅農林も、学徒動員による山林木材の搬出作業から農作業の手伝いも頻繁に、複数人数から最終的には単身宿り込みで精励した。終戦間近な二十年には、同級生百十余名の半数が北海道開拓農家に、残る者が都下各地農家に動員を受けた。私は特攻隊志願による三ヶ月間訓練の為、九州立洗航空隊入隊が十月一日に決まっておったため、二十年三月より八月十五日終戦までの六ヶ月間、日野市の佐伯さん宅に宿泊家族の一員として、一

心不乱に働いた。佐伯さん宅は宮中への献穀をされた篤農家で、経営面積も大きく、男三人が軍隊への応召を受け、その不足を埋める要員として働く事となる。

当時、立川、日野は、各種の軍事工場があり、加えて立川飛行場など米国B²⁹爆撃機の標的となり、併せてP⁵¹戦闘機による超低空機銃掃射に、不安と恐怖の毎日であった。制空権を握った米爆撃機B²⁹の大編隊は、高度八千メートルから八千二百メートルを悠々と飛行。迎え撃つ我が国戦闘機は、その高度へ到達するまでにほとんど打ち落とされる様。また、日野台には重要基地、軍事工場群の防衛のための高射砲陣地があり、迎撃する高射砲弾も五千〜六千メートルしか届かず、はるか下で猛烈に炸裂する様など、あまりにも戦力の差の大きさを、ありありと目にした。

今でこそ一面の住宅化された日野台も、養蚕の盛んだった桑畑を食糧増産のため全面拔根し、見渡す限りの甘藷畑で六月末、ただ一

人その草取りと蔓返しに上半身シャツ一枚で作業中、空襲警報のサイレンの無いなか、突然、艦載機P⁵¹が超低空で飛来、とっさに甘藷蔓の伸びきらない作間に身を伏せると同時に、機関砲の火の玉が左右二〜三メートル位に何十発も打ち込まれ、畑の土埃と強烈な風圧爆音で、言葉に出来ない恐ろしさ。甘藷蔓も広い範囲ふき飛ばされ、土埃で視界がきかない中、飛び去る二人の操縦士もほとんど実物大の顔が目に見えついた。

強烈な爆音と共に飛び去った飛行機もはるか彼方へ、と思う瞬間、旋回し、まさかと思う間に、此方に猛スピードで向かってくる。もう今度こそは絶体絶命と思った時には既に急接近。すべてを忘れて土に噛り付く思いで身を伏した数秒前の恐ろしさの再来で、地震をさせる爆音、土砂の雨、何個もの雷が一度に落ちた感で、爆音の遠ざかるを聞き、「ああ助かったんだ」と、失心状態と全身の強い震えが徐々に収まり、生気を取りもどし、全身

の血の氣が戻り、我にかえる事が出来た。

奉仕の六ヶ月間、早朝から夕方手元が見えなくなるまでの毎日の労働で、夜ともなると疲れが一気に出、眠たさをおさえ、灯火管制の厳しさのなか、光を外に漏らさぬよう、床の中で寸暇を惜しみ、教科書に食い入る程に、必死に夜中までの勉強にも励んだ事が忘れられない。戦が長引き、戦力の弱体化により、連合軍に一方的に制空権を握られ、グアム島、サイパン島からのB²⁹大編隊が、首都東京をはじめ、地方主要都市、軍需工場、軍関係基地が、連日連夜のように爆撃により焼失、破壊され、多くの人命の犠牲が続出した。都下では、八王子市も一夜にして壊滅、勤労奉仕先の日野市においても、二五十キロ爆弾投下により、避難防空壕の土砂が大きな震動と共に崩れ落ち、生き埋め寸前で助かる恐ろしさも味わった。青梅市柚木町に墜落したB²⁹もグアム島から二百機という大編隊をもって、田無市にあった中島飛行機工場を爆撃、その

一機が日本の高射砲による被弾により墜落したものという。同じ頃、日野市においても、B²⁹一機被弾による脱出者のパラシュート降下中、日本の機関銃によって撃ち抜かれ、多摩川の河原に激突、顔の状態が判らない程の様を見たとき、敵兵とはいえ戦争の恐ろしさを身をもって感じた。また、終戦間近に平溝に投下された爆弾により、近隣避難者を巻き込んでの一家全滅となり、唯一人、主人がたまたま御岳山ケールブルカー滝本駅橋脚解体作業中により難をのがれた由。一方、艦載機P⁵¹は近海洋上の航空母艦より百機が各所に分散、超低空により日本の監視網をかくぐり、まさに独壇場の如く銃撃を繰り返し、国民を恐れ戦かす状態がほとんど各所で毎日繰り返された。河辺駅発車の下り電車でも、突然霞丘陵方面より飛来機銃掃射により血に染まった女子中学生の死を目の当たりにし、恐ろしさに震えた。

日本の陸海空の主力が南太平洋にそがれ、

本土戦力の希薄のなか、制海権も一方的に握られ、昭和十八年頃よりは、夜ともなると艦砲射撃のドド、ドンという異様な音響も鹿島灘沖米軍からのものと聞き、本土決戦もそう遠くない事を覚悟する様になった。

広島、長崎に対する原水爆の投下による大きな犠牲により、遂には終戦を迎える事となった。

全てが勝てる状態でない中、為政者たる者、もっと早くに終戦を迎える手段、判断が無かったものか、失わなくて済んだ命を、との思ひも、燃え上がった火が簡単に消えない如くに、全国民の一億一心の合言葉に、誰一人として背く事の出来ない大きい流れにより、最悪の不幸を招く結果となった。

佐伯家では、三人応召の中、長男が戦死、終戦により弟二人が帰宅。結婚間もない長男奥さんに二男が直り、家系を引き継ぎ佐伯家の安泰が計られた。然しその中には長男、二男の子供が存在するという、それぞれが一生

を引きずる出来事も、世間に多い戦争のもたらす不幸というべきだ。

戦後、二度三度と訪れ、その後いかにお過ごしのかの思いから、六十年ぶりに訪問し、仏前に詣で、更に九十才に近い元気な奥さんと、当時の事を昨日の如き思いで長い時間語り合い、最後にお互いの健康を願いながら別れ、戦争のもたらした不幸を改めて脳裡に刻み込んだ。

戦後六十年余、廃墟の中より立ち上り、戦と平和の誓いのもと全国民一心不乱に努力を重ね、世界に冠たる経済大国となり、何一つ不自由のない幸せな日々を送ることの出来るのも、過去の大きい犠牲の上に出来上がった訳で、今後、全国民が終生忘れる事なく前進努力する事を心より祈願し、筆を止めさせていただきます。

私の体験した軍隊生活

吉永 重平



昭和十六年一月、私は現役兵として習志野騎兵十五連隊に入隊した。入隊の朝、氏神様に武運長久を祈願して、大勢の人にブラスバンドで送られて小作駅に着くと、他の入隊者と一緒に駅は賑わっていた。駅を発つ時の沸き上る歓呼の声や万歳に、しびれるような感激を受けた遠い日の思い出は、今も血潮の中に残っています。

千葉津田沼の駅に降りると、同じ入隊する仲間と出合い、気強く騎兵隊の衛門を入り、広い庭に集った。すると、所属中隊から迎えが来て、私は第四隊一班の部屋に案内された。班長と名乗る軍曹から「軍服に着替えろ」と言われ、着替えたが、どれも身につかない。

すると班長から「服に体を合わせろのだ」と言われ、怖いところだと思った。入隊式後、厩舎に案内されたが、千頭もの馬が馬棒に並んでいたのには驚いた。そこで班長から「お前達、明日から乗る自分の馬を確かめて来い」と言われ、中央部を探すと「夏正」と名記した馬棒に、私の名札を発見してほっとした。騎兵隊の行動は全て駆け足であり、四中隊兵舎の入口に集まると、班長が黙って指差す方向に注目する。兵舎入口の上部に、馬術賞、銃剣術賞、射撃賞と三賞の額が掲げてあり、班長が大声で「貴様達、よく聞け。我が中隊は、三笠宮殿下が所属の荣誉ある中隊である。この三賞は、連隊の諸大会で殿下の名誉にかけて獲得した、素晴らしい中隊の証である。」と言うのを聞き、前途の厳しさを感じた。内務班に入ると、歓迎会の準備が整い、中隊長以下全員の古兵が待っていた。赤飯や菓子折、お酒もふるまわれて、新客扱いの歓待だった。消燈ラッパが鳴り渡り、慣れないわら布団に

入ると、一日の疲れが出て、どっと眠りについていた。翌朝、起床ラッパでめまぐるしい活動が始まった。点呼に動作が遅いと気合をかけられ、厩舎に行けば馬が優先で、馬糞などは手掴みで片付け、その手を洗う暇なく食事の準備に取り掛かかり、古兵達の食事開始を確かめてから初年兵は箸をとる。食後は休む間もなく、乗馬訓練に集合の号令がかかる。急いで軍服に着替え、厩舎に駆け付け、最初は裸馬に乗せられた。馬は良く調教されていて、教官の号令がわかる。教官が号令をかけると馬が動き出す。落馬者が次々と出た。教官に「馬に嘗められる」と怒鳴られ、必死でたてがみにしがみつく。次の訓練は、障害飛びや敵陣への襲撃疾走、抜刀切り込み等、困難な訓練が続く、更に射撃銃剣術と、多忙な日課に追われた。兵舎に帰ると、兵器の手入れ、炊事、洗濯が待っている。その上、欠点を見つけては、古兵の制裁が行われる日常だった。六月に入ると春季大演習に参加した。演習

から帰営すると、一等兵に進級した。臨時の外出許可が出て、久し振りに同期の戦友二人で、大久保にある戦友の家に誘われて、ゆっくりと休息した。帰隊して内務班に入り、歩兵に帰隊報告をすると、「今日は貴様達に替わり、馬も兵器も手入れが終わっているから、安心して休め」と言われたとき、鬼の世界で人情に触れた思いがした。七月に入ると、突然、騎兵隊が機甲部隊に変わる。馬は外地に輸送され、営庭には装甲車が並んだ。馬の手入れがなくなり、身体にも余裕が出来たのは嬉しかった。八月中旬、富士山麓で初めての野外実弾射撃が実施され、弾の威力を知る。十一月には秋季大演習に参加して、鹿取鹿島神宮に参拝して、帰途、佐原の民家に宿泊した記憶がある。十二月一日、上等兵に進級して、今度は二泊三日の外泊許可が出て、一年振りに故郷の土を踏む。十二月八日、日米開戦となり、十八日には部隊に出動命令が下り、戦時編成で二五九部隊となり、二十三日、津

田沼駅を後に、長い貨車と共に広島まで走り続けた。十二月二十六日夕刻、輸送船は宇島港を出港した。瀬戸内海を通過するとき、島々に点る港の灯が美しく、別れを惜しむかの如く、淋しい思いだった。翌朝、玄界灘に出て、波の大きさに驚く。船酔いに苦しみながらも甲板に上り、祖国との別れを惜しむ。翌朝、釜山港に着くと、待ち受けた貨車に荷積みの終わるのを待ち、汽車は大陸に向かって走り続けた。朝鮮半島を縦断して、鴨緑江を通過したのは、昭和十七年元旦だった。大陸に入ると、汽車はさらに北に向かい、休むことなく走り続けた。一月三日、牡丹紅の駅を通過すると、今度は北東に向かい、興凱駅で停車した。車外は零下三十度の酷寒地。初めて体験する寒さに、防寒服で体を整えて、恐る恐る車外に出た。荷降しを始めると、防寒帽に氷の花が咲き、寒いと言うより痛く感じた。貨物自動車に積荷が終わると、今度は見渡す限りの雪原を、北東に向かい走り続けた。寒

さに耐えながら二時間ほど走ると、ようやく国境の境の町、宝清の灯りが、小高い丘に見えて来た。兵舎に着くと、満天の星が煌き地平線まで連なっていて、何とも不思議な世界に来了思いがした。兵舎に入ると、ペーチが燃え部屋の中は暖かく、横になるとぐっすり眠ることが出来た。翌日、私達の中隊は本隊を離れ、更に国境に近い龍頭城に配備された。電気も水道もなく、兵舎は丸太小屋で、周囲は塹壕で、暖房は床下に生木を燃やし、煙を通して暖をとった。夜間、歩哨に立てば、狼の遠吠えで身の毛がよだち、その上、怪奇な信号弾が右左に閃光を曳くので、薄気味の悪い夜が続いた。朝になり、周囲を見渡しても何の気配がないので、日毎に落ちついて来た。二月上旬の関東軍の冬季大演習に参加し、雪原の酷寒を天幕で凌いだときの辛さは忘れることが出来ない。演習が終わると、大勢の凍傷者が出た。五月に入り、今度は山岳攻防演習に参加し、出発三日目の午後、大雨でずぶ

濡れになり、天幕の炭火で衣服を乾かしたとき、一酸化中毒になり、小隊全員が一命を落とすところを本部から来た伝令兵が発見して助かった。演習から帰ると休養の為、三日間の特別休暇が出たので宝清の町に外出したが、国境の町には何も得る物はなかった。六月に入ると、また湿地演習が行われ、国境の河を、戦車ごと渡る危険な演習で、ブヨの大群が襲いかかり、蚊帳を顔面に覆ったが網目から侵入して喰いつくので、みんなノイローゼ気味になった。演習が終わると、急速に夏となる。六月十日は下士官勤務兵長に進級した。数日後、国境守備の任務が終わり、部隊が移動する事になり、輸送担当の一部責任者で興凱駅から汽車に乗る牡丹紅からハルピンを経て、更に汽車は南下した。みんな心では南方戦線に送られるのかと思っていたら、公主嶺こうしゅうれいの駅で停車した。荷物を移動始めると、すぐに赤い煉瓦建ての兵舎が見えて来た。兵舎に入ると、電燈があり、水道も暖房も完備していて、

夢の様な気がした。町に外出すると、日本人街には映画館、飲食店、酒場までが並んで、内地に来た思いがした。ある日、戦友と二人で古い公主嶺の街を見物して驚いたのは、郭門をくぐると、建物の両側から二階の部分に龍や唐獅子の彫刻が中天に泳ぎ重なり、三百メートルも続いていたのには啞然とした。七月になると、初年兵が入隊し、教育係を命ぜられ、内務班の責任者になった。落ちつかぬ新兵に配慮し、歓迎会を催し、心を和らげ安心させた。九月に入ると樹木が一斉に紅葉し始めて、足早に冬となる。郊外には、大豆を収納する大きな貯蔵庫が多くあり、収穫期になると荷馬車が各所より集り、たちまち満杯になる光景は、さすが大豆王国を思わせた。十二月末日、三年兵が除隊して最古参兵となり、昭和十八年の元旦を晴れやかに迎えると、また新兵が入隊してきた。多忙な日課に追われながら、この年の九月、公主嶺を中心に関東軍の大演習が実施され、三日二晩の露營生

活で、夜行軍に疲れ朝を迎えると、公主嶺の高台に戦車が千台も集結した演習の規模の大きさに驚いた。演習も無事に終わり、また平凡な訓練日課に追われながら、十二月のある日、突然に私達三年兵に内地転属命令が下りた。翌日は朝から外出の許可が出て、町で帰還の身仕度を整えて帰営すると、今度は後輩達が歓迎会を開催してくれた。最高に嬉しく有難かった。十二月二十八日午後、衛門で送る戦友達に別れを告げ、公主嶺駅より帰国の途につく。汽車は奉天の駅で一時停車したので車外に出て見ると、空が夕立雲で覆われていたので、不思議に思いよく見ると、それは無数に立ち並ぶ煙突からの煤煙であった。当時、奉天の重工業は、九州八幡の二十倍と言われていた。汽車が奉天を出ると、今度は釜山港に向かい直行した。昭和十九年一月二日、釜山港より輸送船に乗り、一月三日夕刻に、九州博多港に上陸し、満二年振りに祖国の土を踏んだときの喜びは生涯忘れることが

出来ない。九州からは汽車で、朝方、習志野戦車隊に帰属し、一月十一日、陸軍伍長に昇進し、服役解除満期除隊となり、三年振りで故郷に帰還した。思えば、日々戦場が激化するとき、幸運に恵まれ帰還出来たことは、実に有難し。不運にも亡くなられた幾多の戦友に、心から哀悼の誠をささげる次第です。



昭和十八年九月満州国大連忠霊塔前戦友の遺骨分納

私の戦争体験

原 島 好 夫



太平洋戦後六十五年の歳月が経ち、思い出を語り、作文を書かせていただきます。

私は、昭和九年一月二日に旧吉野村で生まれ、父は明治三十八年、三田村沢井で出生、次男として大工を営み、母は梅郷二丁目、旧吉野村下郷で生まれ、髪結いの仕事をしておりました。

私が子供の時で、記憶が薄れておりますが、父は、大正時代に現役海軍で横須賀海兵団に入隊し、その後、昭和十八年夏頃、召集令状（赤紙）が来しました。当時三十九才でした。右手中指瘰癧^{ひょうそ}で曲がらなく、まさかこの年で、戦地には思いませんでした。その後、出征する時に、部落の人々に見送られて、近くの

八幡神社でお祓いをしていただき、「元気で帰ってまいります」と、言葉をかけて出かけた。その時、私は十才でした。そして、母と子供、五人の生活が始まりました。

父は、横須賀海兵団所属後、九州佐世保海兵団に移動しました。父から母宛てに手紙が来て、その後、父が一度、自宅へ面会に来て、一才になる前の私の弟を抱いて、帰りました。

父を見たのは、その時が最後でした。

その後も、手紙が何回か来て、母に「子ども達を育てて頑張るように」と書いてありました。

戦争が激しくなり、学校へ行っても、勉強どころか、防空壕掘りや、近所の農家へ行つて桑の皮むきや、山へ行つて油にする松や檜の根っこ掘りなど、さまざまな勤労奉仕をしました。その頃から食料難になり、毎日「コーリヤン」飯や「床サツマ」を小さく切ったもので、お米はほんの少し入っているだけでした。当時は、水も山から竹の節を抜いてつ

なげ、水槽へ溜め込んで、柄杓で汲んで使っている状態でした。お風呂も、一週間に一度ぐらいで、その間、近隣の家で「お風呂がぁいているからどうぞ」と声をかけられたりしました。

やがて、全国ラジオで毎日、警戒警報や空襲警報発令のたび、B₂₉やグラマン戦闘機が低空飛行で機銃掃射したりして、恐ろしい思いをしました。

その後、年が明け、突然、至急の通知が来て、封筒の中に「一月十六日父戦死」との手紙がありました。びつくりしました。その時、父は四十才で、九州佐世保から出航して、本州東方海面上付近で撃沈されました。その頃、姉が十四才、私が十一才、妹が八才、弟が一才でした。「遺骨を引き取りに来てください」との連絡がありましたので、私と母と伯父さんと三人で、横須賀海兵団まで貰いに行きました。遺骨の壺の中は、縦横十五センチぐらいの大きさの写真一枚でした。涙も出ない雰

囲気でした。何日か経って、村の有志の方々と、吉野小中学校の講堂で、村葬していただきました。

その後、八月十五日昼頃、ラジオ放送で天皇陛下の終戦のお言葉があり、家の周りが静まり返ったようでした。

そして、なお一層、食糧不足になり、軍隊から衣服や革靴などを、支給された食料品と物々交換して来ました。

その後、母方の親類の叔父の家族五人が疎開に来ました。家は狭いながらも、八畳と六畳二間あって、私の家族が六畳間で寝泊まりしていました。

昭和二十三年、私が十四才の時、生活が大変で働かなければならないので、近くの知り合いの方から「どんな職種でもよければ」と言われて、父は大工でしたが、私は左官の道の修業を決心しました。行く前に、小学校の生徒と一緒に、川崎の小島新田に潮干狩りに誘われ、翌日、紹介をしていた方と八

王子へ連れられていきました。心配でした。住み込みで五年間辛抱し、礼奉公を二年ぐらいと言われ、家の母から、「修業している間に、どんな辛い事があっても、帰ってきてはいけない」と言われました。

当時は、八王子の駅の周辺は焼野原で、仕事が始まる頃でした。親方の家には先輩の兄弟子が居て、私が「今日からお世話になります」と言って、次の日から、朝から部屋掃除と床を水で雑巾がけをし、冬は冷たくて手がかじかみ、朝晩は台所の板の間で正座して食事し、足がしびれ辛い思いでした。食事がすんだら、すぐに仕事の準備。職人さんが来る前に、現場にリヤカーを引いて行きます。その頃のリヤカーは、戦車のキャタピラの輪でした。現場まで引いて行くのが、重くて大変でした。一日が終えて帰って来てから、私の下着類を洗濯して、休む時間が十時ごろ。寝る時は、敷布団は一枚で、兄弟子が大きくて掛布団を引っぱられ、私は小さいの

で敷布団の上で寝ていて、冬は風邪をひくような思いでした。

その後四年過ぎ、昭和二十六年七月十二日、実家から、夜十一時頃「母病い」との電報が来て、明日お盆で帰るといふ処へ、夜中の十二時頃「母死す」の電報が来てびっくりしました。翌日十三日、親方の了解を得て、実家に帰りました。母は四十五歳でした。残されている三人の兄弟が、心配そうに見守って茫然としていました。私もすぐ親戚の伯父さんと呼んで、相談しました。葬式を済ませて、私は十八日頃八王子へ戻りました。苦勞で手につきませんでした。

そうこうしているうち月日が経ち、一ヶ月に一日と十五日の二日間の休みで、給料一ヶ月千円貰い、実家へ為替で月五百円仕送りをしておりました。姉も民間の会社で働き、妹が十二才、弟が小学校一年で、国から遺族年金を支給していただき、何とか生活が出来たと思います。近所の方々には、良い面悪いこ

とに付き、辛い苦勞をお掛けしました。

その後、五年が過ぎ、昭和三十年、私が帰って、兄弟四人の生活に入りました。その頃から年々復興してきて、建築関係の仕事が忙しい時代になりました。姉が三十四年に結婚し、私が三十六年、その後、妹と弟が結婚し、各々の家庭に入り、自立し、毎日の生活を送ってきました。

昔の方の言葉で、「親がなくても子は育つ」と言うとおり、頑張って来ました。私も七十才まで、この道五十五年一筋に来ました。

後々廃業し、遺族会又老人会で忙しい日々を送っています。現在、遺族会に入会して六十年近くお付き合いさせていただき、支部役員として平成十年頃から正副支部長を務めさせていただき、現在は本部役員を務めている処です。遺族会の年間行事として、春には春分の日、第四支部慰霊祭、五月には靖国神社参拝、秋に青梅市の追悼式があり、年々世代が変わって来て会員の方が減少する時代です。

が、英霊の御供養を忘れなく見守っていききたいと思います。

今後、二度と戦争が起らないよう、平和である事をお祈りし、私も残り少ない人生を、動ける範囲で頑張って、楽しく生きて行きたいと思います。

私の戦争中からの一環の思い出を、文章で書かせていただきました。



村葬の様子

サイパンへの慰霊に参加して

持田 幸男



私が生まれたのは、太平洋戦争も敗色が濃くなった、昭和十八年四月八日です。この年の十月、学徒出陣が始まり、前途ある若者が戦場へ駆り出されました。国家総動員法で、軍人でない老若男女まで戦争に巻き込み、その結果、膨大な犠牲を払うことになってしまった。

父との別れ

昭和十九年一月、私の父は出征しました。父との最後の別れには、火のついたように泣いたと、あとから聞かされました。その後、我が家は父の弟が満州へ出征、あとに残されたのは祖母と母（二十五歳）そして姉（三歳）、叔母（十九歳）、叔父（十六歳）でした。

父の戦場

日本遺族会の資料によれば、父の所属した部隊は、第四十三師団歩兵百三十五連隊（名古屋）で、終戦時の所在地はサイパンでした。部隊は、昭和十九年五月十三日に横浜港を出て、五月十九日にサイパン島に上陸したとのことでした。確固たる陣地を構築する間もない六月十一日には、米軍の大規模な空襲を受け、さらに十三日からは、艦砲射撃と空陸一体の猛攻撃を受けました。そして六月十五日に米軍が上陸してきました。すでに制空権、制海権を奪われた日本軍は、孤立無援で戦うしかなかった。海岸を埋めつくすようなおびただしい上陸用舟艇（百七十隻）や艦船（二十四隻）、圧倒的な物量の前に、日本軍は持ちこたえることができず、退却を重ね、島の奥へと追いつめられました。昭和十九年七月六日、地獄谷の洞窟内にあった合同司令部で、太平洋方面艦隊司令長官南雲忠一中将、第四十三師団長齊藤義次中将、第三十一軍参謀長

井桁敬治少将の三人が自決しました。翌日七月七日、日本軍は最後の総攻撃をし、玉碎しました。当時のサイパン島の日本軍は、四五、三二一名（陸軍二九、四三一名・海軍一五、八九〇名）で、戦死者は四三、二七四名（隣のテニアン島は、七月三十日に玉碎。戦死者九、九六二名）。サイパン島の北端、マツピ岬まで追いつめられた邦人は、断崖絶壁から身を投げ自殺した。その数、八千名とも一万人ともいわれ、岬は今でも「バンザイ岬」と呼ばれている。

サイパン島へ

あれから六十余年たった平成二十年の夏（七月三十日～八月五日）私は日本遺族会の戦没者遺児によるサイパン、テニアン慰霊の事業に参加しました。北は宮城県から南は長崎県まで、二十八名の方と行ってまいりました。九段会館に集合し、結団式をした後、全員で靖国神社に参拝し、成田から出発しました。サイパン島とテニアン島では、二班に分

かれ七ヶ所で慰霊祭を行いました。サイパン島にはいたる所に戦争のツメ跡が残っていました。日本軍が使っていた病院、刑務所、発電所、飛行場、弾薬庫、黒木大隊の陣地跡には大砲が、中型戦車や燃料タンクなどサビついた残骸が横たわっていました。また、最後の司令部となった洞窟や、追いつめられ身を投げたというマツピ山の断崖絶壁にも立ちました。慰霊した場所は、チャランカノア、サイパン神社、地獄谷入口、バナデル飛行場、タツポーチヨ山（島の最高峰四七三m）で行いました。私の父は地獄谷という場所で戦死したということで、ここに祭壇を設け、各自持参した家族の写真、好物であったタバコ、酒、ソバなどさらにふるさとの水、米を供え、読経の流れるなかお線香をあげ、弔いました。そのあと各自、事前に用意したお父さんへの思いをしたためた原稿を読み上げたあと、最後に大きな声で「お父さん」と叫びました。また、テニアン島では、ソーラ神社とカロリ

ナスで慰霊を行いました。テニアン島は青梅市と同じぐらいの面積で細長い島です。比較的平坦で、飛行場に適していました。米軍はここに目をつけB²⁹の飛行場を作りました。この島から無着陸で日本本土へ爆撃が可能になり、以後、日本の各都市は連日空襲を受け大被害を被りました。平成二十年、私達が慰霊に訪れたマツピ岬（バンザイ岬）は、六十余年の歳月が経ち、悲劇を物語るものは岬一帯に立ち並ぶ無数の慰霊碑が印象的でした。今は何事もなかったように、紺碧の空にエメラルドの海が広がっていました。

サイパン島の歴史について

サイパン島及びテニアン、パラオ等の南洋諸島は、以前ドイツ領であった。大正三年に起きた第一次世界大戦で、日本はドイツと戦い勝利した。その見返りとして、ドイツ領だった南洋諸島を国連の委任を受け戦前まで日本が統治していた。パラオに南洋庁がおかれ、サイパンにはその出張所がありました島の主

な産業はサトウキビ栽培で、南洋興発株式会社が島の産業を支えていた（北の満鉄、南の南興と呼ばれた）。最盛期には五万人の従業員が働いていて、比較的豊かな生活をしていた。ガラパンの町には、郵便局、病院、百貨店、映画館、新聞社、料亭もあり放送局もあった。サイパンには船便の他に、二式飛行艇による定期便が、二五〇〇キロメートル離れた横浜から十二時間で結んでいた。

余談ですが：

最近、美空ひばりさんの生まれた実家（横浜市磯子区）を訪ねた折、近くにこの飛行艇の基地があったことを知りました。この基地から飛行艇が飛び立つとき、辺り一帯に爆音が響きわたったと説明板に書いてありました。この飛行艇がパイヤ、バナナなど、当時としては珍しい南方の果物を運んできたそうです。

おわりに

サイパン・テニアン慰霊の最終日、参加者

全員で、サイパン島にある中部太平洋戦没者（二十四万人）の碑に参拝しました。この席には現地の日本領事館から樋口領事に出席していただきました。各県遺族会から献花し、境内に記念植樹をしました。その後アメリカのメモリアル・パークに墓参し、帰国しました。

私の人生記録

石田 光紀



私は、調布村字友田の石田時蔵の九人兄弟の長男として生まれました。男三人、女六人で次男は三才で逝去しました。

私が兵隊に取られたのは、召集により入隊致しました。甲種合格をのがれて第一乙種になりました。昭和十三年十一月十五日に召集令状が参り、十一月二十五日に近衛第一部隊に入隊し、歩兵砲中隊三班に配属されて、六ヶ月間教練を受けました。私が入隊した三班には、成木村の住人で木崎と青梅住人で稲葉と西田の三人が居りました。木崎は見習士官で少尉で戦地に私は木崎少尉と共に中支の戦場に配属されました。南昌の奥地の奉新城と云う小さな街に迫撃砲部隊谷岡中隊に入隊し

て、成木村の木崎少尉と共に戦場で毎日戦いました。そして敵軍と交戦中に木崎少尉が負傷して内地に後送されて、その代わりに長渕の三田少尉が私が居ました中隊に来ました。私は第二小隊に所属してた隊の小隊長になりましたが、私は敬意をする気持も失せてしまい、そして小隊長に対して無言の儘の状態になりました。

宜昌作戦では、三田小隊長と共に敵軍と八ヶ月間戦いました。宜昌作戦が終了した十一月十五日に召集が解除されて、内地に帰還命令が伝達され、近衛第一部隊に帰還し、里に帰り、私は驚きました。戦地から我が家に入りました時に父親が日本はアメリカと、戦争を始めるかも解らぬ様な気がすると、戦地から帰りました私に話しかけた。私は気持が愕然となつてしまい、戦争なんか何でやるのかと思いました。無学者の人間である私などは、唯だ働いて生活するのみで、毎日が無我夢中の家庭にあったため、そして私は村野直一さ

んの勤めていた名古屋工廠に入職し、電気技術課に世話して下されました。村野直一さんと私は仲の良い働きの仲間でした。此の工廠は後に陸軍航空工廠と変名されました。

村野さんは工廠の守衛の役職で、そして私と村野さんは、再度の招集で二人は共に同隊に入隊し、近衛混成部隊で矛三八五一部隊となりました。部隊は芝増上寺の境内に集結し、兵隊は本堂に宿泊しました。そして部隊は一月から五月二十五日まで増上寺に宿泊していました。その時の五月に米軍飛行機が東京の上空に飛んできて、早稲田大学の校庭に爆弾が投下されました。そして私達兵卒は、皆米軍と戦えば戦死すると思いこむ兵卒が多くなり、南方の戦場に移動する事が部隊内で囁く者がありました。そして部隊は朝鮮に移動し、汽車で満州の奉新の駅から汽車で中国大陆を走り南京に渡りました。南京から蘇州と上海の中間にある崑山の街に部隊が集結しました。そして、部隊の任務は清郷工作と云う警備で、

部隊は米軍と戦う事もなく、平和なる江南地帯の警備の任務で、私は部隊本部の経理課に配属され、部隊の糧秣配送の任務に服す事になりました。

そして終戦後に一年間、中国軍の捕虜となりました。中国軍の配下において、毎日街中の清掃と中国兵の警備に使用され、終戦一年後に捕虜生活が解除され、上海の港湾から日本丸の練習船で内地に復員致しました。

我が日本国の軍隊は世界大戦で米軍に負け、軍部は崩壊してしまい、軍人の位階勲等は放棄状態となり、無益なる物となりました。私が戦争の功勞で授与された勲八等も功勞賞も伍長の階級も放棄の状態となりました。今は軍人恩給だけが支給されています。

私が生まれた友田町の山に西多摩郡在郷軍人会の射的場がありました。陸軍記念日の時に毎年射撃大会の競技がありました。射撃場の周囲の山林に赤旗が立てられ、この大会に関係のない者は赤旗内に立ち入る事べからず

の札が要所要所の場所にありました。そして
嚴重なる注意が村全体に通達がされていまし
た。此の射撃で使用され打ち落とされた銃弾
の鉛玉を取る為に、私が小学生の時に遊び仲
間の同級生と三人で銃弾が飛んでくる方向の
標的がある山の峰に登りました。その射撃を
三人で見てた時に急に喇叭の音が山に鳴り響
き、同時に射撃が中止になりました。その時
在郷軍人数名が、私と山で見ていた仲間の所
に走り、大きな声を出しながら近くに來たの
で、私も二人の仲間も驚いてその場から走り、
夢中で逃げて離れた山の藪の中に隠れました。
そして私と仲間の二人は、その山から早々と
逃げ出し、家まで走り戻りましてほっとしま
した。その事が親に知られて、父親に怒られ
てしまいました。命に関わる危険なる出来事
で、こんな危険なる射撃場がどうして友田部
落の山に建設されたのか。その理由なる条件
が友田部落にありましたのであります。

その条件は明治時代から大正の時代に変る

頃の時代に友田部落から郡長が出ており、此
の郡長の手引で射的場が友田部落に建設され
ました。

私の人生は昭和の時代に戦争と共に人生が
ありました。満州事変支那「中国」事変、そ
して中国大陸と戦いました。米国と戦争が展
開され、世界戦争となり、七年間戦地にあり
ました。私の青春は戦争と共に去ってしまい、
そして幸いにして戦死も免れ、平成の世代ま
で生きる事が出来ました。戦争で犠牲になり
ました御霊に対し、毎日仏前に拝礼致して居
ります。

あの日、あの時

小田中 幸子



今から六十五年前は、戦争で毎日のように空襲、空襲で、そのたびに学校は授業中止になり、下校する状態であった。私は、当時小学校二年生、八才でした。父は戦地に行っていました。戦地の拠点「海軍」、熊本県人吉市内へ、母、姉、弟、そして私とで慰問に行き、父と会いお互いの無事を確かめあって、その帰り、映画館を経営している親戚の家に泊まった夜、空襲になり、米軍機より焼夷弾が落ちてくるので、姉と二人、敷布団をかぶって、母の後から走りに走って、土地勘の無いところを逃げて、四ツ山という山の、坂の途中にあった防空壕に飛び込んだ。電線がシューと燃え、あたりは火の海。空から焼夷弾が、ま

るで雨のように降ってくる。米軍機が去った後、一面は焼野原で、方角もわからなくなっていたが、母達と一緒に親戚の家に行くと、映画館も家も焼けてしまっていた。親戚の人達と無事会えて、おにぎりを一個ずつ食べて、その後汽車に乗り、長崎市内の自分達の家に着き、ほっとひと安心したのもつかの間、数日後の八月九日、原爆が投下された。

その日は真夏日で、外は炎天でした。午前十一時頃、私は自宅の庭で近所のお友達とおままごと遊びをしていました。その時は、空襲警報は解除されていましたが、飛行機の爆音が聞こえたので、空を見上げ、味方の飛行機かなと思っていました。途端、ピカッと、太陽より強い光、閃光が走り、慌てて一目散に家の前の防空壕へ走り込みました。一緒にいた姉も弟も同時でした。それからドーンと凄い音がしました。そのあと大騒ぎになり、大人も子供達も何が起ったのかと怯えていました。やがて母の声が聞こえ、子供達の名前

を呼びながら、防空壕の中へ入ってきました。壕の中はてんやわんやの状態でした。少し落ち着いた後、恐る恐る防空壕の外へ出て、家の中に入りました。部屋の中は、爆風の圧力で、箆筥、戸棚など建具類は倒れ、硝子等は粉々に割れて散乱し、足の踏み場もない有様です。夕方、陽が落ち暗くなるに従って、街中が燃えて、炎が波のように揺れ、炎の海のようにでした。長崎市内は、坂が多くて坂の街です、わが家は少し高台にあったので街が良く見え、これからどうなるのかと不安でした。わが家は、爆心地から四・五キロメートル離れた場所です。近所の伯父は、浦上にある自分の店から戻って来ましたが、身体の半分以上は火傷で、やっと歩いて帰って来たのです。不幸中の幸いでしょうか、お店は宝石店で、大きな金庫があり、その影にいて、かろうじて命拾いをしたようです。数年かかって火傷も治ったようでしたが、体調はすぐれず、いろいろ病気で苦しんだようです。従姉も、三

菱へ講師として勤務していましたが、原子爆弾が投下され、仕事中そのままの状態で即死でした。もう一人の従姉は、現在も顔にガラスがささり傷になり、何度も手術をしたけれど、完治していません。戦争、原爆による犠牲者は他にも沢山います、特に、戦争ということで、核兵器を使用するのは、いかなる理由があってもいけません。

広島ウラン型、長崎プルトニウム型、三十数万人の命を奪った原爆、人間だけではなく、自然も破壊されます。子から孫の命を守るためにも、人類、地球を破滅させる核兵器は使ってはいけないと叫びたいのです。ノーモアヒロシマ、ナガサキ、世界人類の平和を維持できるようお願いしています。戦争。核兵器を使っではいけないと、若い人達、子供達が、戦争にまきこまれないように、語りべとして語りついでいきたいと思います。

学徒動員の地で原爆と対面す

―十五、十六歳の青春―

光島 章一



旧制中学校三年生十五歳の夏、我ら同級生は、広島県呉市広町の海軍工廠に動員された。

呉市広町の平地は、中国山地を源流とした黒瀬川が、瀬戸内海に注ぐ河口一帯に長い年月をかけて上流の土砂を堆積してできた。

そのデルタ地帯平地半分の海辺側は、海軍工廠第十一空廠の工場群でひしめいていた。

我らは、海軍工廠に入廠すると、海軍の指揮下に入った。同級生約百名の中の自分を含めた三人は、工場内八号棟内の精密機械部に配属された。

戦局は風雲急を告げる。南方にまで戦線を広げていた日本軍は各地で敗退、ガダルカナ

ル、ニューギニア、フィリピン等それぞれ孤立して、ほぼ玉砕に等しい尊い命を失って敗北していく様子が、悲壮で高揚した大本営発表の口調で想像できた。アメリカ軍は着々と軍備を整え、日本軍の要衝の島々を陥落せしめて来る。

中でも日本本土直近の要衝マリアナ諸島、最も死守しなければならなかったサイパン島が陥ちた。更に硫黄島が敵国支配となった後は、完全に制空権を失った。日本空軍は最後の抵抗として帰還不能の特攻隊の自爆攻撃に頼ることになる。

昭和二十年冬が過ぎると、祖国の国難は直接本土に迫った。制空権を完全なものとした米軍は、サイパン島などからB29が飛来し、東京大空襲をはじめとする大中小都市の空爆は日常の事態となる。その中で、京都、広島などの被爆が無いことは不気味だった。むしろ海軍軍需工場地帯の呉市全域は、米軍が見逃す筈はない。そのうち徹底的に攻撃してく

るだろうと予想していた。予想通り、昼夜を問わず空襲警報が鳴った。小回りのきくグラマンやロッキードの艦載機の空襲や機銃掃射、B29からの重爆は、死の恐怖を伴った。死の予感はずっとあった。

度重なる爆撃を受けたにも関わらず、八号棟は、海軍工廠のもっとも西北側の隅にあるせいか、重爆投下の直接被害からは免れた。それは単なる偶然であつたろう。毎日、自分の死はいつになるかを考えていたのだから。

六月末、米軍による熾烈な上陸作戦によって沖縄が陥ちた。悲しい情報だった。その後、日本本土は何処であつても簡単に空爆を受け易くなった。それどころか、何処かの海岸から、いつ米・英の上陸作戦が始まるかも知れない、との噂が流され始めていた。

七月に入った。

ある日、僕と山本、坂田の三人は、安永寮の総監室に呼ばれた。その要件は、今迄勤務していた八号棟の職場ではなく、全く別の勤

務地に異動せよとの命であつた。なお、この勤務地は絶対に秘密だから友人にも話さず、たとえ親への手紙にも勤務地の地図などを書いてはいけないという条件も諭された。

海軍工廠も一大転換を図っていたのだ。

ある日、新勤務地に案内され驚いた。呉市広町の平地半分を占める海軍工廠の工場地帯ではなく、広町平地の北端にたたなずく野呂山山系の山裾であつた。秘密と言われただけあつて、工場移転も秘密裡に行われたらしい。

黒瀬川を遡ると山裾に当たる。その山裾の右の山に大きな横穴を掘ったのだ。今迄の八号棟のように大きなクレーンなどがあるわけではなく、大型の機械類が移されたわけでもない。ごく普通の旋盤や精密工作機械を、トンネル状の一方の空間に設置して、裸電球を天上に吊るした、突貫工事だったことが分かる。ここで秘密兵器を作るらしい。

既にベテラン職工員は機械を稼働させており、我々学徒は指示に従って資材を運び入れ

たり、部品や製品を油の滲みた布で拭いたり洗ったりすればよい日が何日か続いた。

四月からは、働きながら中学四年生となり、七月十日を過ぎ、生年月日を越えたので、僕は十六歳になったと思っていた頃だった。その年は、来る日も来る日も炎天下の暑い日が続いた。我らは安永寮から出て、黒瀬川畔の長い土手道東側を歩き山裾の横穴^{トンネル}工場に通った。七月も末になって、我ら三人の学徒と三々四人の若い職工を集め、このトンネル工場長は、図面を広げて言った。

「この横穴を出入りする東側傍のできるだけ山裾際に三十畳くらいの堅穴を掘ってくれないか。高さ二メートル五十センチ。」

工場長の堅穴造りの目的を訊くと、「資材でも製品でも、横穴の中に入れる場所が狭いし、出入口の周囲に野晒して置けば、雨露で錆びて品質を落とす。穴を縦に掘って、保護色の屋根を覆えば、敵機に見付かることもなし、一石二鳥。」

という訳だった。

七月末になって、図面どおりの大きさに紐を引いて、四方の角に目印の竹筒を立てて、準備を整えた。八月に入って、スコップで掘り始めた。掘り始めると、暫くは砂利に大きな石も混ざり、時間もかかりそうだと分かる。広い面積を掘り進め、外側に砂利や石をスコップで放り投げる作業は、軀全体を使い、思った以上に腰が痛む。十分もすると荒い息をして、へたり込んで休まざるを得ない。ふだんから弱々しい友人の坂田は、三日目には熱を出して安永寮で寝ている。ようやく三十センチメートルの深さまで全体を掘り進めたら、今度はスコップで放り投げた所が高くなって、放り上げるようになるため、更に軀を痛める。時折、工場長は、歩いているか見に来ていたが、放り上げてうず高く盛り土になった外側の土砂を、何処からか一輪車を持って来て、近くの窪地に、職工らと何回か捨てに往復した。

「やってみると、土石というもんは重いもんじゃちゆうことがよう分かる。あんたたちもゆっくり休み休みやってくれえ。」と言った。

八月六日の朝も、朝早くから暑い。黒瀬川の水面に反射する朝の光がチカチカ痛い。長い土手道を歩いて、八時前に工場前に着いた。いつものように、皆トンネル工場から出て来て、いっせいにラジオ体操を始める。

僕らは、昨日まで掘り下げた竪穴造りの中に入り、スコップを握って右足裏でグサッと土砂の中に差し込み、西側の外側高く放り上げる。その動きを四く五回繰り返して放り上げた目の先、黒瀬川の上の、灰が峰山岳の頂上がパツと光った。さらに太陽の光りに満ちている大空の、その明るさとは異質な、何倍も明るい銀白色の光が、山岳同士に反射して波打った。

何の音もしない。僕はスコップを土に立てて、光った山の上あたりを三十秒くらいも見

詰めた。

「おい、今光ったのは何じゃったのかのう。」傍の同級生山本に言った。

山本も、黙って首を傾げているだけだった。何も分からぬまま、スコップの柄に手をかけた。そのとき、光った山辺りが『ドカーン』と山岳を破るような大音がして、その音と殆んど同時に物凄い白い水蒸気がむくむくと上昇し始めた。その勢いの強さに驚き、掘っていた穴から飛び上がって、呆然と見詰め続けた。

誰も無言で、只眺めるだけだ。次から次へと大きな筒状の水蒸気が昇っていくのを。勢いはなかなか衰えない。下から上がってくる水蒸気が、上の方に先に昇っていった水蒸気を追い越すのではないかと思うほど力強いエネルギーで昇る、昇る。その白色の太い柱が、大空の朝の自然の雲と同じくらいの高さを越すかに見えた頃、昇っていった水蒸気の重さが重力と拮抗する時点で、ようやく水蒸気は

行き場を失ったように、両横に広がりつつ水蒸気の木の子（茸）になった。

広島市に原爆投下後九日目、終戦。実家に帰ると、思いもしなかった新たな悲劇が待っていた。断末魔同然の唸り声をあげて喘いでいる三歳上の兄の姿だった。その兄のその後について書く紙面がない。当時、島根県境に近い広島県北の小学校で代用教員をしていた兄が、何故に僕が見た巨大な木の子雲の真下にいたのか――

被爆後の学童疎開

伊 井 栄 子



昭和二十年八月十五日早朝、当時国民学校四年生の私は、母に見送られて、山陽本線西広島駅（己斐駅）から学童疎開に出発した。

小さなリュックを背負い乗った汽車は、牛馬を運ぶ貨車だった。通気孔が頭の上にあつたが、中は薄暗くて、臭気に満ちていた。しやがむ場所さえなく、子ども達がいつぱいに詰めこまれていたので、昼近く目的地に着くまで、そのまま立ち通しで身動きできず、暑さとひといきれで気分が悪くなりそうであったが、子どもたちはみんな静かに我慢していた。

広島は、八月六日に原子爆弾が落とされて、私たち家族は、己斐駅のホームで夜を過ごし

ていた。家々は全壊、又は焼失し、着る服も食料も住む場所さえなかった。そうした中で、第二次の学童疎開の知らせが張り出された様だ。私は母子家庭で育ち、母と別れるのが辛くて、とても疎開する気になれず、我儘を通して五月の一次募集には手を上げなかったのだと思う。でも、この惨状の中では、もう否応なく行くことになったのだった。貨車のなかで、これからどんなところへ連れていかれるのか、どんな生活が待っているのか、残された家族はどうなるのか、被爆後の子どもたちの顔は、どの顔も疲労と不安で誰も黙っていた。

列車は、中国山地の中央で、山の中の小さな駅に、昼近くにやっと着く。駅前の商店の二階で休憩を取ることにになり、ここで玉音放送を聞いた。内容は聞き取れなかったが、生まれて初めて天皇陛下の声を直接聞いたことに驚きがあった。放送が終わった時、周囲の人達の雰囲気から、もしかしたら戦争が終わ

ったのかと思った。そう考えつくと、今まで張りつめていた心がふっと軽くなった。喜びが湧き上って、飛び跳ねたい気持ちだった。戦争が終わったのだったら、このまますぐに引き返してもらえる。母のもとに今日戻れる。毎晩のように、空襲警報のたびに防空壕に向かって逃げ回った、あの嫌な警報のサイレンの音もないのだ。

それなのに、それなのにどうしたことか。そのまま何の説明もなく、何班かに分けられて、私たちの班は、広島県世羅郡大見村の善福寺という小さなお寺に向かったのだった。別の班は、男女共に東小学校というところに向かった。

私たちがお寺に着いた時は、第一次疎開で六年生から三年生までの女生徒五十名がぎっしりと詰め込まれて生活していて、いわば私たち第二次の生徒は、着のみ着のままであとから割りこんだ形だった。一次疎開の子どもたちは原爆投下の前に疎開したので、衣類、

学用品、薬品など各々が持っていた。私ほとても肩身の狭い思いで、なかなか集団に溶けこめなかった。お寺から村の学校までは一時間近く歩く。すり切れたわらぞうりには、石ころを踏みしめるたびに痛い。並んで帰る下校途中では、村の子どもが石を投げてきたりする。

当時、学校でどんなことをしていたのか、どんなことを教えてもらったのか、全く思い出せないが、戦争が終わって日本が負けた直後、先生たちは呆然として立ち止まっていたのではあるまいかと思う。戦争中は、小学生といえども、厳しく集団の規律が課せられ、甘えなど決して許されなかった。為に無断でとび出し家に帰ろうとする子どもも何人かいた。戦争が終わったからといって、急に変わることはなかった。

私は毎日が辛くて堪らなかった。そのような中で、ある日、寮監先生が病気になり臥された。私たちは交代で、枕元に付添い、頭を

冷やし食事の世話をした。その日は学校に行かなくてもよいのだ。何より学校へ行かないのが嬉しくて、嬉々として働いた。

そんなことがあって間もなくの頃、特に理由もないのに、何か悲しくて、朝から晩まで涙を流している日があった。あとで考えてみると、その日は長兄が息を引き取った日であった。

十八才の長兄は、市内広瀬小学校の夜間の警備に動員されていて、建物の下敷になりながら、奇跡的に無傷で夕方帰ってきた。朝からずっと心配し続けていた家族は飛び上がって喜んだが、九月五日、放射能を全身に浴びていて鼻血を流して死んだのだった。原爆投下後、ちょうど一ヶ月目に、何の治療も受けられず、どうしてこうなったかも判らず、ただ周囲の傷ついた人たちを介護し、怪我人をリヤカーで運んだり、雨漏りを直したり、男手のなかったところで働きづめであったという。

私が九月十五日に疎開から帰った時は、家の前の大田川の川土手で焼かれて、小さな白い壺に入っていた。あの日、理由なく涙を流しつづけた日、九月五日だった。

八月十五日、終戦の日の朝、学童疎開に出発してから一ヶ月、ほんの一ヶ月しか経っていなかったが、長い長い日々は一年にも感じた。突然に家に帰ることになり、身支度を整えて、お世話になったお寺の坊守さんにお礼を言い、別れた。考えてみれば、各々だれもが食べるものがない中で、私たち疎開児童を大勢受け入れてくださり、やさしく世話をしていたいただいたことなど、感謝の気持ちで満たされなければいけないことだったのだ。その当時は、ただ家に帰りたいばかりであり、お別れに、細くて赤いさつまいを蒸かして一人に三本ずつ配られたことが嬉しくて、これは母と兄と姉のおみやげにしようなどと考えていたのだった。

広島駅に迎えに来てくれた姉は、私をひと

目見て涙ぐんでいた。身体中に腫れものがあり、足の指などは化膿して、運動靴に張りついていていたからだ。

十五年位前、当時の六年生の先輩から手紙が来た。あの懐かしい世羅の学校やお寺を訪問して交流しましょう、というものだった。早速、三年から六年の生徒、それに付き添った先生達三十数名が、バスで何十年振りに訪ねた。

道は広くなり舗装され、学校も新しくなっていたが、流れていた小川や坂道などは、記憶を辿るのに十分であった。その日一日、小学四年生の私の姿を想い出し、ほろ苦く、しかし懐かしさに浸っていた。

戦後、復員された善福寺のお坊さまと腰が曲がった奥さまは、私たちが訪れたのを心から喜んでくださり、庭に竹でそうめん流しを準備され、お腹いっぱいご馳走してくださった。

慈愛に満ちた笑顔のご夫妻だった。

学童疎開は苦しい体験だったが、子ども達も、このようなやさしい人々に支えられて生きてこられたのだと思った。

『青梅のできごと』

青梅の被害

青梅の地域には空襲の目標となるような、目立った軍事関係の施設も、大きな市街地ありませんでした。首都東京や八王子のように空襲にさらされることはありませんでしたが、まったく被害がなかったわけではありません。

昭和二十年（一九四五年）二月二十五日の朝、アメリカ軍の艦載機が東青梅駅に停車中の電車に対して機銃掃射を加え、悲しいことに氷川町（現在の奥多摩町）に住んでいた少女にあたり、若い命が奪われてしまいました。当時、友人で同級生だった方などのお話によると、この気

の毒な少女は都立第九高等女学校の二年生で、女子学徒隊として動員されていた、中神の大神航空という会社から帰宅の途中だったということです。四月には、B29が市内柚木の山林に墜落し火災が起きました。また、四月には、平溝上空を通過した米軍機が目的もなく爆弾を投下、数軒の民家が破壊され五人が亡くなりました。

疎開してきた人びと

ミッドウェーの海戦で日本軍が敗れると、米軍機の本土来襲は時間の問題という緊迫した事態に追い込まれました。特に首都東京をはじめ大都市の危機は高まり、昭和十九年（一九九四年）政府は「疎開令」を発して、都市住民や軍需工場などの地方分散をはかりました。疎開は、

まず幼い学童から始まりました。青梅にも都会から多くの人びとが疎開してきました。品川区立国民学校の三年生以上の学童たちも親元を離れて集団でやってきました。皆、十歳前後の子どもたちです。どんなにか辛くさびしかったことでしょう。

東京都心の人ばかりでなく、八丈島や神津島からの島の人びとの疎開もありました。島の習慣で、頭の上に荷物を乗せて運ぶ女性の姿が、青梅の人たちには珍しく映りました。そのほか、親戚や知り合いを頼ってくる人も大勢いました。昭和十五年（一九四〇年）には四万人に満たなかった現在の青梅市域の人口が、五年の間に五万数千人にふくれあがったということです。ところによつては、人口が六割近く増加した村もあったということです。疎開した人々の中には著名な文化人や

芸術家もいました。滝の上には歌人の高田浪吉氏が、柚木には作家の吉川英治氏が、沢井上分には日本画家の川合玉堂氏が、また、二俣尾の高源寺には彫刻家の朝倉文夫氏、同じく二俣尾には画家の田中以知庵氏、新井勝利氏が疎開してきました。

戦後、高田浪吉、吉川英治、川合玉堂各氏らは青梅に留まりました。青梅の自然とそこに住む人びとを深く愛したからです。これらの人びとが青梅の文化に大きく貢献したことはいうまでもありません。また、著名人ばかりでなく、各地から疎開してきた人びとの中には、実にいろいろな人がいました。短い期間とはいえ、その人たちと青梅の人びとの交流は、文化的な面や、生活感情の上でもそれまでに無かったさまざまな刺激をもたらしたといえます。

引越してきた図書館

第二次世界大戦のさなか、青梅には都立小石川図書館の本がたくさん疎開してきました。現在の青梅市立第一小学校（当時は青梅国民学校）校庭の隅にあった武道場が図書館になりました。もともと学問を尊ぶ気風のあった青梅の人びとは、はるばる疎開してきたこれらの書物を大切に保管しました。

やがて敗戦となり、新しい日本をつくっていかねばならない時代になりました。当時の宇津木林蔵青梅町長は、次代をになう青少年のために、図書館をつくろうと奔走しました。その結果、昭和二十二年（一九四七年）という戦後間もない時代に、いち早く都立青梅図書館を開館することができましたが、その蔵書の基礎となったのは、小石川図書館から

疎開して来ていた本でした。青梅図書館は地元の文化の向上に大きな役割を果たしました。

戦中戦後年表

西暦	年号	青梅市と周辺地域の出来事	おもしろな出来事
一九三九	一四年	2 各町村消防組を警防団に改組した 4 青年学校が強化され義務制になった 5 奥多摩橋開通 5 御嶽神社奉納武道大会復活、以後終戦時まで行われた ※この年、調布村部落常会設置	3 大学軍事教練必修となる 4 米穀配給統制法公布 5 ノモンハン事件起る 7 国民徴用令公布 9 第二次世界大戦勃発 10 価格等統制令公布
一九四〇	一五年	5 東京及び近県に天然痘発生し、各町村臨時種痘実施 6 青梅町商業組合設立 6 神代橋架橋工事着工 9 部落会、町内会隣保班、市町村常会設置を通牒される 10 紀元二千六百年奉祝国民体育大会青梅町大会開催 10 青梅町をはじめ各村蚊帳釣環献納運動実施 11 霞村、聖旨奉戴強化村に指定される 12 青梅町寺院教会等退蔵金属品献納運動実施 ※この年国民体力法により各町村青年の体力検査実施 各町村に生活必需品配給制度実施	6 砂糖・マッチの切符制実施 7 日本労働総同盟・大日本農民組合など労働農民組合相ついて解散 8 国民精神総動員本部「贅沢は敵だ」の立看板を市内に配布 9 日独伊三国同盟成立 10 各政党解党し大政翼賛会結成 11 モンペ姿の七五三行われる ※この年、紀元二千六百年祝賀行事多彩
一九四一	一六年	3 各町村文部省令により、男女青年団と少年団を統合して「青少年団」を結成 3 『青梅郷土誌』刊行される 4 米穀配給統制実施 11 三田村森林	3 国民学校令公布 4 東京・大阪両府で米穀配給通帳制はじまる 12 日本軍ハワイ空襲、太平洋戦争勃発 12 言論・出版・集会・結社等臨時取締法公布

一九四二	一七年	組合設立 ※この年、小曾木村・成木村森林組合設立	1 日本軍マニラ占領 2 シンガポール占領 2 衣料切符制実施 2 食糧管理法公布 2 大日本婦人会創立 4 米機日本本土初空襲（東京・名古屋・神戸） 6 ミッドウェー海戦大敗北、戦局の転機となる 7 大本営、南太平洋侵攻作戦の中止を決定 12 ガダルカナル島撤退決定
一九四三	一八年	1 吉野村健康保険組合設立 7 西多摩地方事務所開庁 7 吉野村区長制を廃し、部落会隣組制度を設ける 7 霞村森林組合設立 8 霞村薪炭生産組合設立 10 小河内貯水池工事中止 ※この年、小曾木村診療所建設 青梅町役場庁舎新築	5 アッツ島日本守備隊全滅 7 東京都制実施 9 イタリア連合国に降伏 9 上野動物園の猛獣薬殺される 12 学徒出陣はじまる
一九四四	一九年	2 御岳登山鉄道営業中止 4 各村農会と信用組合を統合して農業会を設立 4 霞村区長制を廃し部落会を設置 4 「稿本三田村史」刊行 7 御岳、氷川間の奥多摩鉄道開通し、青梅電鉄とともに国有鉄道となる 8 各町村へ学童多数疎開 9 大倉	6 マリアナ沖海戦で空母の大半を失う 6 父島・硫黄島に敵機初来襲 7 米軍サイパン島占領 7 学童疎開はじまる 8 学徒勤労令公布 10 神風特別攻撃隊編成される 11 B 29 東京初空襲、以後大規模爆撃続く ※この年、日本経済は急速に崩

一九四五	二〇年	集古館及び浅草寺の国宝、沢井雲慶院に疎開 ※この年、武陽銀行は埼玉銀行青梅支店となる 成木村診療所設立 都立種畜場開設 各町村への一般疎開者多数 勤労奉仕、供出一段ときびしくなる
一九四六	二二年	2 米軍艦載機により東青梅駅停車中の電車機銃掃射を受ける 3 霞村国民義勇隊発足 4 B 29 柚木の山林に墮落 4 平溝に爆弾落下し五名死亡 5 調布村農業会設立 6 三田村国民義勇隊発足 9 各町村内の学童疎開引上げる 10 米軍騎兵第一師団青梅町役場等に駐留する(十二月十日まで) 11 霞村婦人会新発足 12 三田村診療所を開設 12 川合玉堂沢井横尾に転居 ※この年、成木村営バスを運行 各町村食糧増産に腐心する
		壊の一途をたどる
		3 硫黄島の日本軍全滅 3 東京夜間焼夷弾攻撃で廃墟となる 5 ドイツ無条件降伏 6 米軍沖縄占領 6 国際連合設立 8 広島、長崎に原爆投下 8 ソ連対日参戦 8 日本無条件降伏 10 GHQ 政治犯釈放、特攻警察・治安維持法・治安警察法廃止 11 日本社会党・日本自由党・日本進歩党結成 11 GHQ 財閥資産凍結、解体 12 日本共産党再建 12 選挙法改正 12 農地調整法改正公布(第一次農地改革)
		1 GHQ 戦争協力者の追放を指令 2 金融緊急措置令公布 5 極東国際軍事裁判はじまる 5 復活第一回メーデー開かれる 7 ソ連抑留邦人引き揚げ開始 8 日本労働組合総同盟結成 8 全日本産業別労働組合会議結成 10 自作農創設特別措置法等公布(第二次農地改革) 11 日本国憲法公布

一九四七	二三年	される 11 塩船観音寺本堂阿弥陀堂、仁王門重要文化財に指定される 都立青梅保育園開園 1 公職追放各町村に及ぶ 各町村の常会・部落会、隣組制度廃止される 2 三田村国民学校焼失 3 都立青梅図書館開館 3 各町村学務委員、青年学校廃止 4 各部落回覧制度廃止され、掲示板を新設 4 都知事、町村長、参議院議員、衆議院議員、都議会議員、町村会議員選挙行なわれる 7 青梅町社会人対抗卓球大会開催 9 台風により多摩川洪水、家屋等倒壊する 10 12 各町村警防団を消防団と改組 ※この年、都立誠明学園を新町に設立 各校 PTA を創立 岩蔵の亜炭採掘再開始 小曾木農業協同組合設立 青梅町衛生会設立
一九四八	一三三年	2 三田村農業協同組合設立 3 三町村（青梅、調布、霞）組合立消防署発足 3 青梅町公安委員会設置 3 青梅警察署発足 4 天皇、皇后永山公園植樹祭に臨席 4 青梅町商工振興会設立、調布村農業協同組合設立、小河内貯水池工事再開 5 成木村農業協同組合設立 6 霞村農業協同組合、霞村共済組合設立 7 御岳キャンプ場再開 8 青梅町衛生会解散 10 東京都教育委員選挙執行 11 小曾木村国民健康保険組合発足 11 青梅町民運動会開催 11 農業調整委員選挙 ※この年、吉野村農
		1 学校給食開始 2 八高線列車転覆 3 民主党結成 3 学校教育法・教育基本法・教育委員会法公布 4 六・三制実施、国民学校を小学校と改称 5 日本国憲法施行 5 第一回国会開会 6 片山内閣設立 11 農業協同組合法公布 2 新警察制度発足（国家地方警察、自治体警察、国家公安委員会設置） 3 民主自由党結成 4 G H Q 祝祭日の国旗掲揚を許可 5 夏時間実施 7 教育委員会法公布 10 極東国際軍事裁判判決 12 経済安定九原則発表

一九四九	二四年	業協同組合設立 吉野村診療所完成 成木村農業 共済組合設立 成木村養蚕農業協同組合設立 各 町村農地委員会農地買収売渡を行なう 各町村中 学校校舎完成 上長淵保育園開園	1 日本学術会議発足 1 法隆寺金堂焼失 1 全労 連世界労連へ加入 3 ドッヂライン発表 7 下山 事件・三鷹事件発生 8 松川事件発生 8 シャウ プ税制改革勧告 11 湯川博士ノーベル賞受賞
一九五〇	二五年	1 第一回青梅町成人式開催 5 青梅町公民館開館 7 青梅町広報創刊 8 奥多摩火葬場組合（青梅、 調布、霞）設立 ※この年、河辺・千ヶ瀬・友田 ・三田・小曾木・都立霞保育園開園	3 自由党結成 6 朝鮮戦争おこる 6 GHQ 共産 党幹部追放 7 金閣寺焼失 7 日本労働組合総評 議会結成
一九五一	二六年	2 青梅町・調布村・霞村、市政施行可決 2 西多 摩郷土研究会発足 4 青梅市誕生 4 青梅第二小 学校（現四小）創立 4 市長、市議会議員選挙 5 三田村成人学級開設 5 宮の平住居跡発見され る 5 第一回青梅市赤ちゃんコンクール 5 第一 回市議会定例会開催 6 「西多摩郷土研究」創刊 号発行 7 青梅市農業委員会選挙 9 「青梅市広 報」創刊号発行 10 「青梅市展望」発行 10 青梅 市体育協会設立 10 青梅市福祉事務所開設 11 第 一回市民運動会開催	3 農業委員会法発布 4 食糧公団廃止、民営米屋 発足 8 民間放送開始 9 サンフランシスコ講和 条約、日米安全保障条約調印

青梅市内の平和像紹介



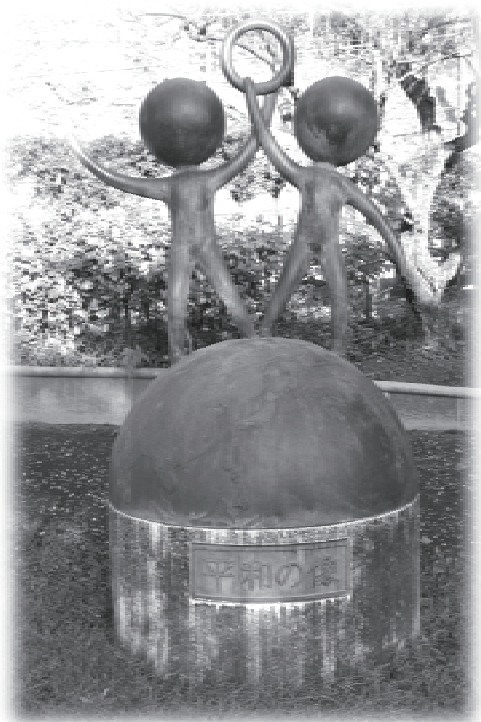
「平和」（制作：松野伍秀氏）
1961 年 4 月 5 日 青梅市役所設置



「平和のよろこび」
世界連邦建設同盟青梅支部設立 30 周年記念（制作：尾形喜代治氏）
1989 年 10 月 31 日 河辺駅北口設置



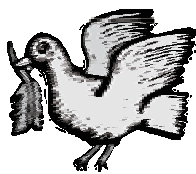
「平和像」
世界連邦建設同盟青梅支部設立 20 周年記念（制作：松野伍秀氏）
1979 年 10 月 18 日 青梅駅前設置



「平和の像」
 青梅市立西中学校の生徒のアイデアを
 参考に制作
 1995 年 石神前駅設置



「平和」
 戦後 50 年を記念し地域の皆様に御協力
 いただいたアイデアを参考に制作
 1995 年 宮ノ平駅前設置



「ここから世界へ」
 1994 年 3 月 30 日 沢井駅前設置



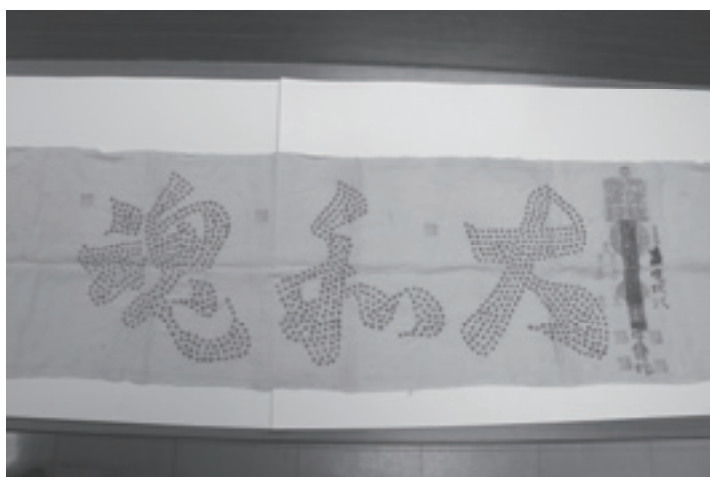
軍帽



飯盒



水筒



千人針



奉公袋（裏）



奉公袋（表）



風呂敷



愛国ゆたんぽ（陶器製）



防毒マスク



メガホン



弾丸入れ



鉄兜



墜落した飛龍の部品



防衛食容器（戦時中の缶詰代用品）



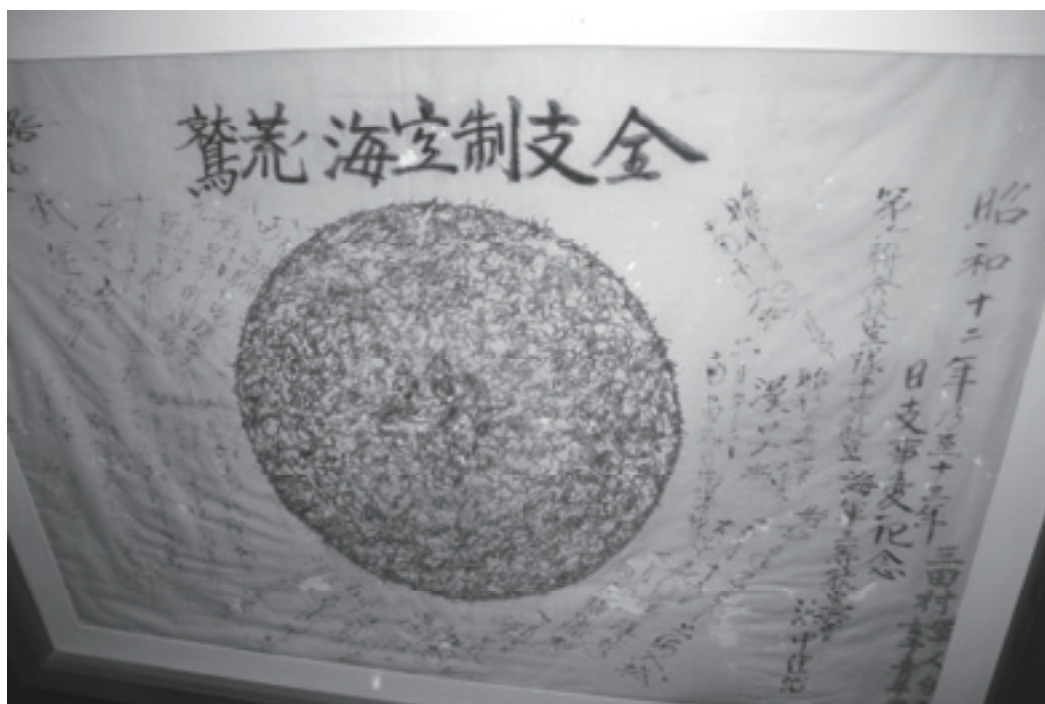
ラッパ



防空頭巾（子供用）



防空頭巾（警防団）



千人針



警防団半纏



警防団制服



軍服



軍服

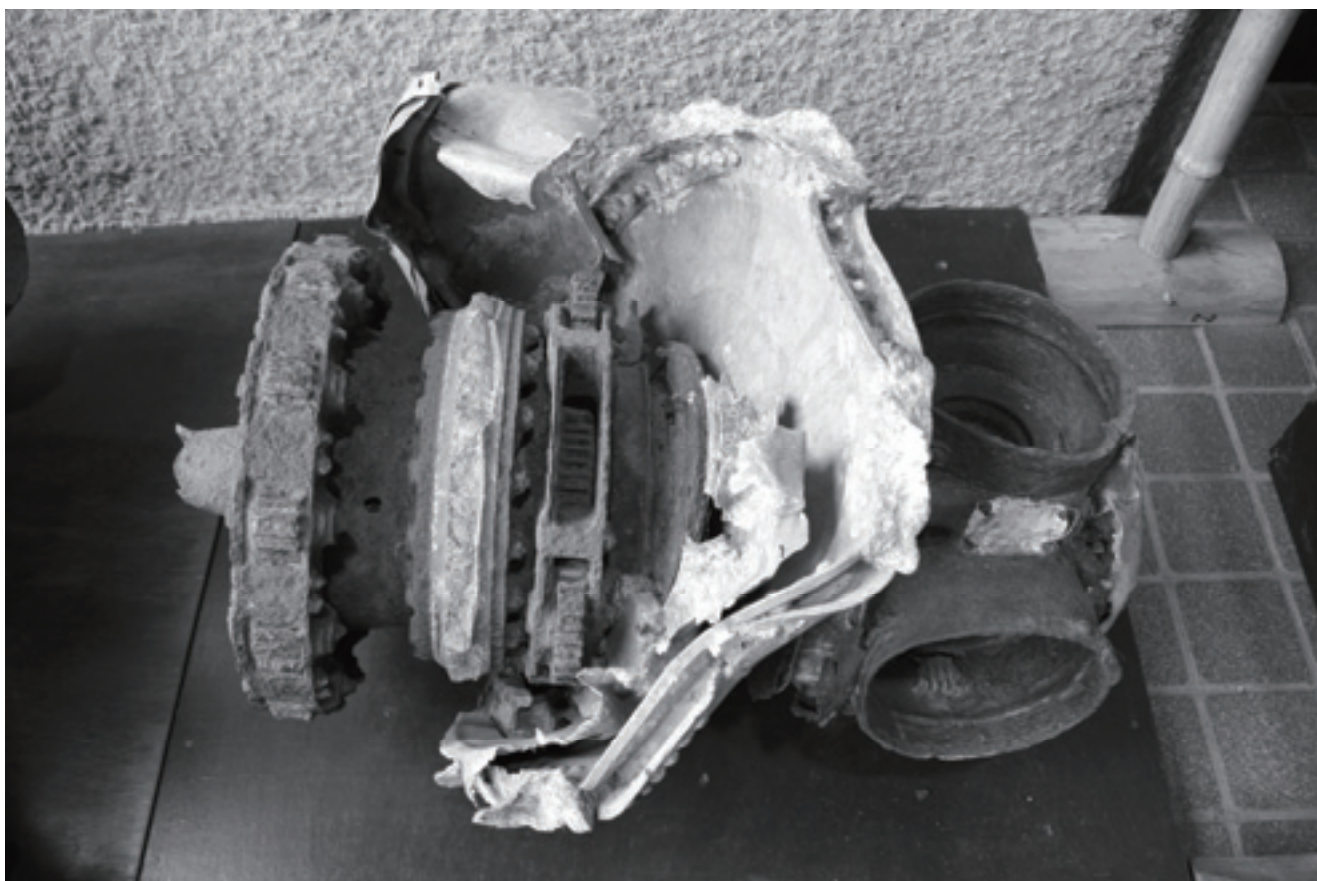


墜落した B29 のエンジンの一部

昭和20（1945）年、吉野村（現在の青梅市柚木町）の山林に墜落した B29 爆撃機のエンジンの一部です。

日本側の記録によると、昭和20（1945）年4月2日未明に北多摩地区が空襲を受けたが、午前3時12分頃、柚木の山林に B29 が1機墜落したとあります。その際、墜落の直前に4基あるエンジンのうち、1基が脱落し、多摩川に落ちたと当時の目撃者は語っています。

このエンジンは、その後、放置されたままでしたが、昭和54（1979）年に地元の方達により引き上げられ、保管されていました。



墜落した「飛龍」のエンジンの一部

昭和20年8月11日の夕刻、大日本帝国陸軍の重爆撃機「飛龍」が吉野村柚木（現在の青梅市柚木町）の山中に墜落しました。終戦4日前のことです。墜落機は埼玉県熊谷の第1航空軍、第16独立飛行隊に所属していました。

当日は、静岡県浜松飛行場での事故機の支援任務を終え、傷病兵2名を乗せて熊谷に帰還する途中、何らかのトラブルにより墜落したものとされます。

墜落した場所は、愛宕山尾根の東端付近で、梅ノ木峠と三ツ沢峠をつなぐ稜線の北側斜面です。

平成16年1月18日に多くの方々の献身的な努力によって、急峻な谷底から100キロを超えるエンジンの一部が搬出されました。

三菱四式爆撃機「飛龍」(キ67)

高 度	7, 000 m
行動半径	1, 000 km
最大速度	550 km/時
乗 員	6名～7名
爆弾装置	500 kg
全 長	18.7 m
全 幅	22.5 m
上昇力	6, 000 m/14分30秒

世界連邦平和都市宣言決議

第2次世界大戦において原子爆弾の洗礼を受けた我が国が、率先戦争の災禍を防ぎ、恒久平和を樹立するために努力すべきは、憲法にも示されるとおり当然の責務である。

この大目的達成の手段として、あるいは国際連合の組織変更、あるいはその他の新たな組織によって各国の武力を廃し、連邦を形成して地球を一つの世界とする運動即ち世界連邦建設同盟に市を挙げて賛意を表し、国内はもちろん国外の平和宣言都市と相結んで国家宣言にまで国民の総意を盛りあげ、以って最終の目的を達成せしめようとするにある。

世界連邦平和都市宣言

青梅市は日本国憲法を貫く平和精神にもとづいて、世界連邦建設の趣旨に賛同し、全人類の恒久平和と福祉増進に努力することを決意し、ここに平和都市たることを宣言する。

昭和33年4月5日議決

青梅市非核平和都市宣言

国際連合において安全保障理事会の改革が進められようとし、日本が世界の中で平和の達成のために積極的な役割を担おうとしている今、一方で、核不拡散条約からの脱退の宣言と核兵器保有を発言する国があり、核の脅威は去っていない。

青梅市は、世界唯一の核被爆国である日本の一都市として、これまで、世界連邦運動協会と一体となって、平和事業の推進に取り組んできた。

ここに、戦後60年を迎えるに当たり、平和の誓いを新たにし、この世界が核兵器や戦争のない平和な世界となるように念願し、非核平和都市となることを宣言する。

宣言文

世界の恒久平和は、人類共通の願いです。

私たちは、世界唯一の核被爆国の市民として、日本国憲法の平和の精神を守り、平和を愛する世界の人々と手を携えて、核兵器や戦争のない平和な世界の実現を願い、努力してきました。

しかし、核兵器の拡大拡散の脅威はなくなり、世界の各地で武力紛争や戦争が絶え間なく続き、平和とは程遠い様相を呈しています。

青梅市は、戦後60年を迎えるに当たり、平和の誓いを新たにし、この世界が核兵器や戦争のない平和な世界となることを願い、ここに非核平和都市となることを宣言します。

平成17年7月19日

あとがき

平成二十二年は戦後六十五年という節目の年です。青梅市では、この機会をとらえ戦争の悲惨さや平和の貴さを考え、後世に伝えるため、戦争を体験した市民の方々から寄稿いただいた体験談を本冊子にまとめました。体験談中の写真は、寄稿していただいた方から貴重な写真をお借りして掲載させていただきました。

また、巻末には、青梅市内に設置されている平和像と青梅市立郷土博物館に収蔵されている戦争関連の収蔵品の一部を紹介させていただきました。

戦後生まれが多くを占める現在、戦争での悲惨な体験を知る機会がますます少なくなってきています。

この体験集ができるだけ多くの人々に読まれ、戦争の悲惨さを知り、平和が永遠に続くことを願ってやみません。

なお、編集に当たっては、原文をできるだけ忠実に掲載することといたしました。一部加筆修正したことを申し添えます。

本冊子の発行に当たり、寄稿していただいた方々にこの紙面をお借りして深く御礼申し上げます。



戦後六十五周年 戦争体験集
（私たちの記憶）

・平成二十二年十二月発行
・発行・編集 青梅市役所秘書広報課
青梅市東青梅一〇一〇一
電話 〇四二八二三二一一
印刷 株式会社 成和印刷

